あ宣まとこ

宇治巻　三

哥々詞を名とせり

CV.47コ

PL788
.4
.G4
1654
vol.47
copy 1
Asian
Japan
Case

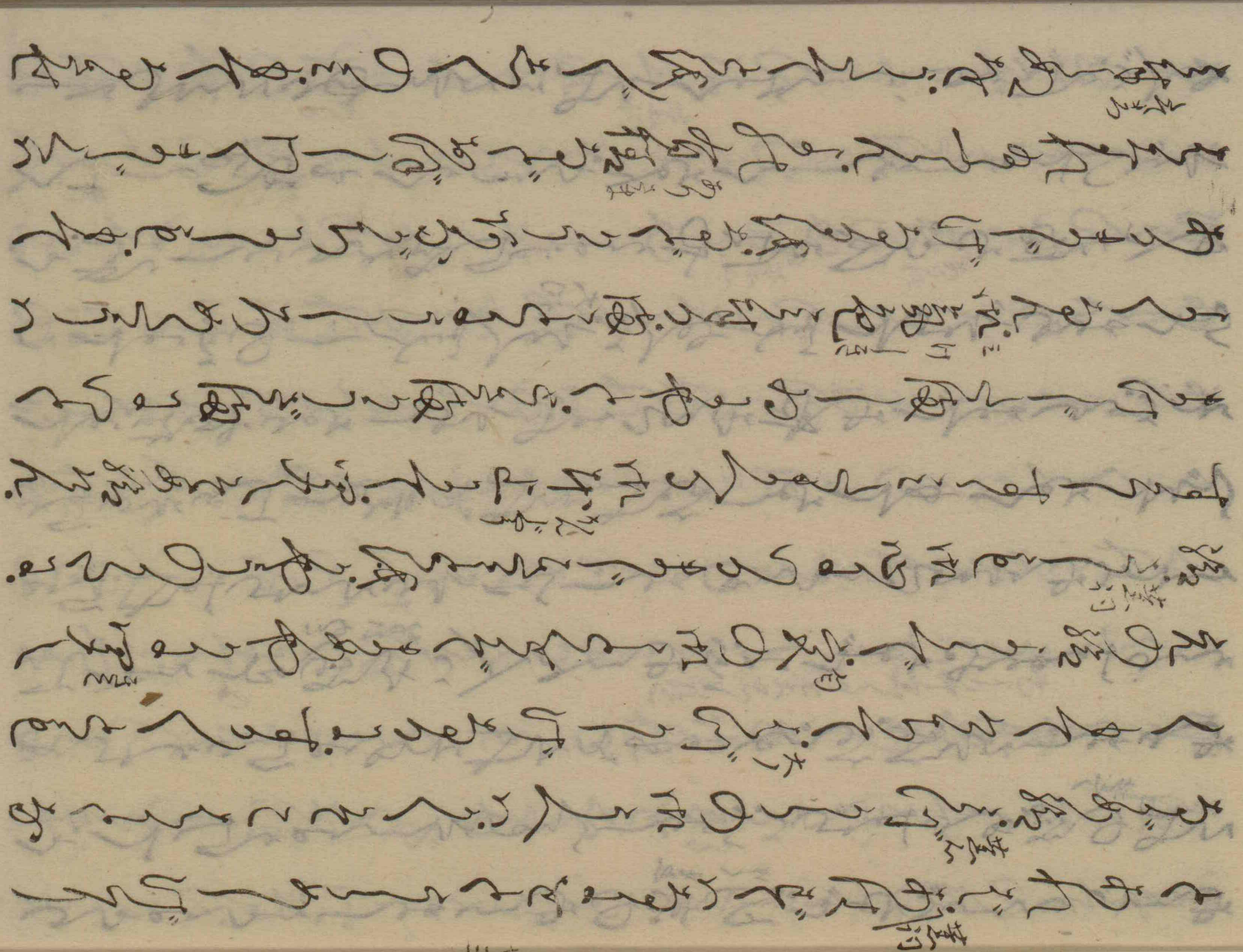
2004551382

葉六十七の秋より冬まで書

あまたことしこゝちなれ給ふし川風もこれ妹（あき）いと（姫宮ハ）
もしこゝちくもれがるしくて（八ノ一回忌ノ事）れちてのこといそがせ
給ふ大かたのあるべかしきことどもハ中納（葉）てどれお
ざりちんつうまつりたまひけり（姫達）こゝまはほうぶ
くのこと（さやう）程のうざりこゝ夜かたまれあけかひを人の
きこゝ日うまきこゝがひていとちまこ給もいとものも
かたくあられまかくなよ（葉ノ事）そのれうきつこちまうら
ましかばとこゝしたり（葉）こゝづからもまうでゐていま
もとぬぎ（服衣ノ事）すて給ほどのれとゝひあきかぎき
こゝ給ふ行ざりもこゝ（姫宮へ之）まれり（名）こゝやうがう（香）れいとひ（糸）
きこゝぐりてぐくてもへ（姫宮達詞）ぬうちまどうちかたひ給ほど

ありけり。むもとびあげたりけり。里のすゞれのつまよ
里。本恨（きちやう）のかゝろびなすさそこしなれば。そ（蕉ん）のことく心
えて。門が泪（ゐなぐ）をば玉にぬりなんとうちずじゐへる。
伊勢（せ）の地（ぢ）のごもかうくしそいありけめと。おかしうさこ
ゆりもうちのひとはこさしたりがほ。さしいる風
こゝ海をんも川くましうて。あれ（姫恋ん）とはなしまやうか。
貫之（つらゆき）がこれ世ながらの別（まれ）とぞ。心ぼそきすぢな
ひきかけそんをなどげにあることぞ。人のこゝろを
のぶるこゝろありけるぞ。いでは。此（蕉）鞍（ぐん）文（もん）川くるも。
聖佛供養（きやうをとけく）ぞしるべきこゝろどんなるぞうき出かへ
かすぐ里のつゐでにまゐしかと

総角（業あげまき）まるがき契（ちぎり）を結（むす）びこめおるゞ心（和イ）よ
まことあはるんとかきてこそなりぬへば例（れい）のとう（大ん）
かさなれば
大ぬきもあへぞもろき泪（なみだ）の玉の代まるが
きちぎりをいかゞむすばん



ぬへばかばかりうしをすくこれミしきゆうろろかり
さがひてうしめしくなんどもかくもおぼしつく
らんさ風など氏さはやうまうけ給ちりましがれと
いとまめごちて罪しぬへばさが大河へ罪しじの心までこ
そいかうまでおやしきよれこめしなる有様まで
ぞてなくもてなし侍れそれを覚しつゝざりけり
とそいおさきこともまじつまうろちすれげま
うるすまゐなどに心あらん人いとおもてことは
あるまじき氏何ぞまもをくれそめまけうちま
これの筆ノ給めるすぢいいましへもさしるうけてと
あらばかくらばなど引束のあらましごとまとり

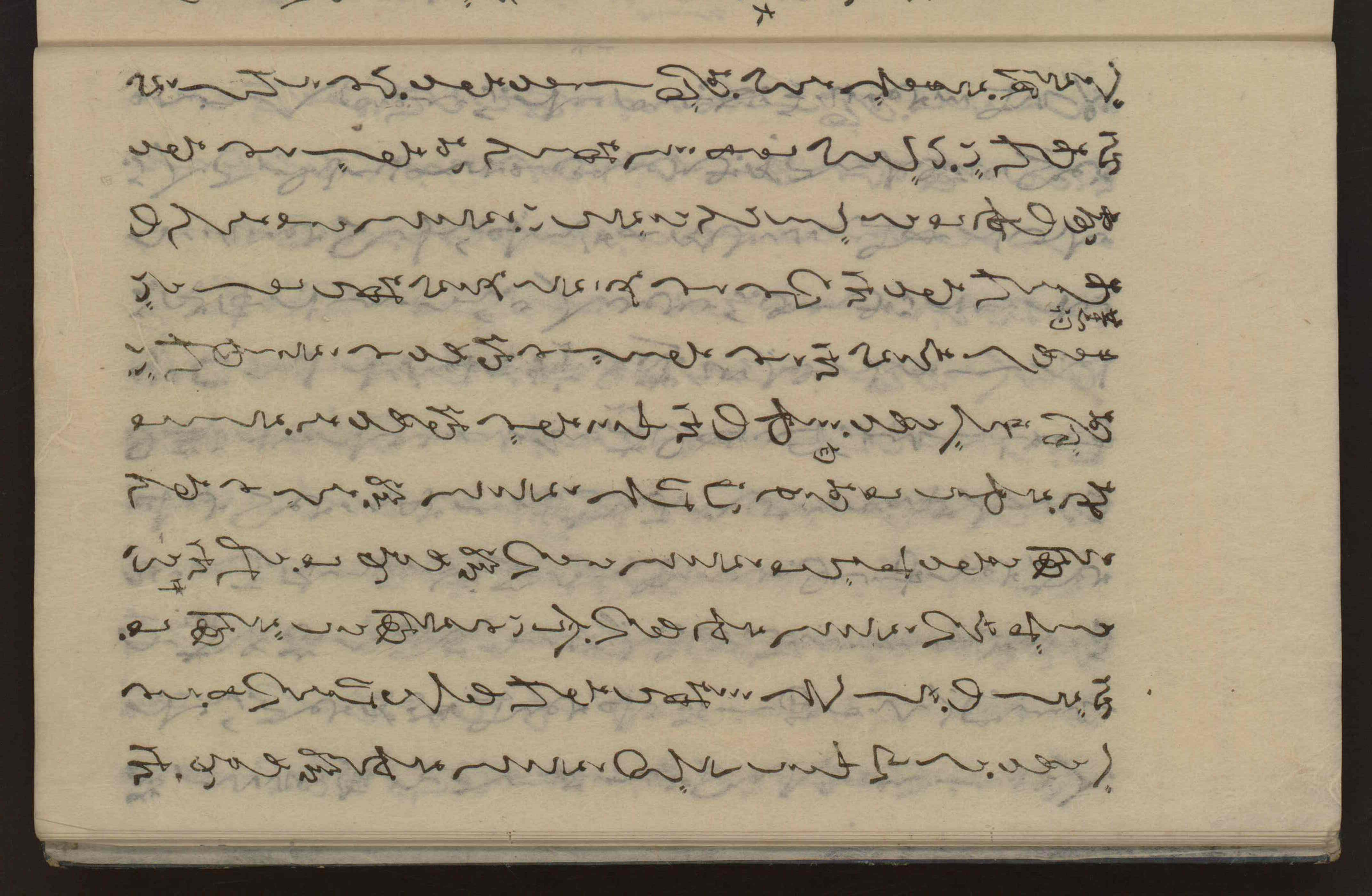
まぎての給をくことをもなりしかば、ゐ給かくゐ
き夜までよづきこゝろ方（かた）をしこゝろ由べくおぼしをきて
げりとなん。しあはせ侍れば、さもかくもきこえんかる
なくてさりいすらしよごもりこゝろほどまて、こゝやま
（元より中宮ノ事と大宮ノの給之）
がくれまいこゝろぐるしうこえし給人（中）のれう人をい
とくくちきまはなしまてずもがれと人しれぞ
あけかたしうおぼし侍れば、いかなるべきよりか
あらんとうちなげきて、もれしこゝろ給けり程の
けるひいと哀（あはれ）げ也。げざ（蓋ん）やかるおとなびてもいかでか
さらしがりこ夜もむとことゝりまて、例（れい）のふる（年）べ
めし出てぞかくしひ給。年（蓋詞）比もこゝ後（のち）の世ざ夜の

こころだへまて。すくこと思りそめしを。ハ。おれ心ぼそげる
おぼしなるめりしれす思のほほひ。これれことぐもを。
心まありきてもてなしきこゝ思べくなん。の給ちぎり
てしを。ハ。おぼしときてなり給しれありさ面ども
まはさがひてれこころだへどものいとぐあやまくま
もれづらげなるハいかまハ。おぼしときひなかる者
ことなるまやとうるがりしきこくさへそひてなむ。
をれづら字つる人給やうもあらん。いとあやしき
かぶまて世中にこころをしむるかるなりつる後
さるべきまてやうまでも字なれまけん。世人も
やうくいひなすやうあるべかめるまかなすじうは。

むし
芳のれことをたづへさうらず。我も人も。よれつゐは
心とけて。さてしかはずやとおもひよりそ。つさなり
なべさことまても。さやうなりしまくやを
あるなどの給つゞけて。句やのれことをもうくさうこ
ゆるまうしろめたうはあらじと。うちとけ給さ海
なしぬはうちくまさりとをおもほしむけたる
ことのさ海あらん。我いうまくとうちなが見川く
のたまへば。地例のわろびたる女房(ねうぼう)などはうろことを
そ。ぶらささうしらもいひまぎて。ことよりなど
もすめるを。弁ふいとさはあらず。こころのうちまはおもま
ほしうるべされことぐもをとせんど。詞もとよりく

人まさぐひゆゑるれくせどもまゐれバまやいうまも
いうまもよれつゐまゐまやうやうまどおもひより給
へ家れ童色まゐん給ふぬ。うくてさふふこれれ
もさしどろぶまゐまのこれもしげあるこれもとの
うくろ人も給らざりこさ。こ紙挫(すて)がうくおもふうざりハ
ほどくまつけてまうでちり。無しのゆるさすぢ
なる人もおほくこなりすてこうあるりまして
いまはしぢしもこちさまりがこげまとび給ふ(八)お
えくましくよまこそうぶりありてうくほゐん
れかりさ夜ハいとくおしくもうまどこぶいるるれうる
えしさまおぼしもとぐこほりつれ。いまはうう

又これはなまさは男どもまて、いかまもくらゝ
なびきなへんをおろがちまそしつ宮のん人は
かりてもれこころをもしらず、いふかひなきこと
まてこそはあらめ、いかなる人かいとかうで世をば
すぐしもてなべき、松の葉をすきてつとむな
やまぶしどまいけり男の拵(すそ)がさきまりてこそは佛の
はをしへをもごこちくつかれてもをこなひなす
なれなどやうのようにぬこと紙罪しきせ、つかさ
はこころどもこゝぶれなめべきことおほく詞めれど、
こもむべくも抱し給ひず、なるれ君をなんいかで
人めしうもあつかひなしなんと思きこし給



とゝなれど心のひ大くゝなるんがぢりせひもつゝ
よまぢ絵とまりぬべきもれなりなれば おらゝめ
てさはえせひろ絵すまじくなんよれつゝまるよ
びかるすぢまもあらずやこぐりやうは地備(へざ)てご
とのこいろさ海ならずさしせりひてどまりくり
さざめるきよれ物語とへざてなく罕えてつゝ絵
ゆゑろのん海ならずもてなし絵りんなんとゝうう
るどのぎやうまひつまりしさ程なるもなくていと
さうぐせくなんせ中のせふことのあられまも
おりしうもうれもしうもどさまつけゝる有様を
ゝろまゝめてのゝるゝ身なれば さすがまゝつざ

なくおぼゆるまうとうまじうこれこさしゆる。
明石中文
こさいの文ばかりなれくしうさやうまそこハかと
なきこゝのまくなるうぐくしさ代。男しかるべさ
まもおしず三条の女三やハおやとこさしゆべさまも
おしぬれ代りくしさなれどうざりあれば。こ
やすくなれ男しさせずしそのかの女ハすべて
いとうらくつましうおそろしう覚して心うら
よるべなく心ぼそこさなりなる代ざりのすさひまても。
けさうぐちこゝろとはいとまばゆくあり川りぞ。
もしこゝろきこゝろくしきまてまいて心ましめるる
うこのことハ打出りこともゆゑくそうしめしうし

いぶせさを。さこしの氣色をごまかしなしぬこそ
我ながらかしこくはかなくもいはざりけれ。家の
内にとさもあともしらずまはなるしらじと。
まりそてやいこ給ふめなどうちゐおまへり。おいでん
きこえ。うかゞひこゝろばそくおもまはしげなりけれ
行さ夜とぞてまちしきをいつしせなるゞやとせんど。
いづるをもちてかへしけなるれ行さ夜どもしなれど。
おもひのほかにはえさくしず。うかゞひにさまりかそ
拍子かりぐしのどやりは。家人まはとうてやすらひ
くらし給つ。おぼやりなくず。きれうらこゞちなう
ゝ氣色やうしく帰りなくぬゆけだしつらうて。

うちとけて罪も給りんことも、いよくくるしかれ
ど、大方までハありがたう、哀なる人の心なれば、こよ
なうともてなしがたうて、對面(さいめん)志なふほとけのおハ
する中の中をあけて、こゝあるしの出けざやかり
かしげさまて、すぐれは屏風(びやうぶ)をそへてぞおかすると
まもおほとなるぶし、氣らすれど、なや(茎汀)ましうて、はら
いなるをおしいなるぞいさめて、かたいふしなへり。
れくぶ抱ちぞ、けざとはなくしなして氣らせなへり。
れともの人ごまも、ゆへくしきさうなくどして、
いざさせなへり、らうめいさうかたりにあ川まりて此
かまへハ人げとをくまてなして、志あぐと物語(あがたり)

望九ゝ絵*うちさくべうもあらぬもれかしおろしげに
世所(あいぎやう)つきて牠の絵へろさ海のちれめるしぎろに
入て出いらくもちろしかくほどもちさもれく
へぐてぐらり後さちりぜろまて御ぼつちくさ
てすぐきてころぼそされおまりかこがましうも
あらうまくさけぐけられどうれちくてたらの
世中のことぐも衰まもおかしうも。さ海ぐ四ノ前
おほくうたひ望九絵。内は人ぐちうちどの(大ノ)絵
さきつれど。さしもてもちれ絵いざらちんとさふ
べかめれば。いとしもまもりきてぎさしきぞき
けしこれよりみて。佛の此ともしぜもりくぐる

人まろし掬むつしうてものびて人めきどもおもしろ
きぞうちのくさごうちおやましう侍るさしあ
らひて暁がたまで又笑みむとそうち語らんとする
なしきあり。やまおちはけ侍りつる人はましていと
ろうしされどもう見えうけ給はらるまゝなどさあてこそ
侍れば、らすそくいとせ給ふれば、いと心ばそくさんそて。
屏風をやをらをしあけてへあめいどむくつけゝ
てあるうぢりいりらまくすまひきとくめされて。
いとじうもうろうされば、備ちかきとはりくみ
とやいふらん、めづらかなるけざくれどあはめみすて
きぬのはかくおうしされば、備めれ心さとしてもあはし

ければ学しきしきんとぞかし。笑げくかるりとも
いるるりるよおぼしよるよかへあらん。佛（かけ）のれまん
まてちりごとまさて偽らんうさてなをぢさせ
給そ此心やぶらじとしそめて偽れば人いかくしも
をしたりせふまりじゃあれどよりまさぐるしれも
のそるし偽ぞやとて心まくふ程なるほかげまれ
ぐしのこぼれかりさる紙がきやつまりしこゑ人ぞ
人のれけらひせふやうまりほりおりしげなりうう（慧心）
うろぼそうあさましきれすこうまきいてこん人い
さたり而あるまじげなる紙我なるで勇くる人も
あらましけばさぞやくこれましいまくちおしき

ワぎなるまじと、さしうるのころのやすらひさん、
あやうくおぼしめへどいふかひなくうし（大）とおひて、
なさ給ひ氣色のいとく（慧心）おしかれバかくハあしで
とのづら心ゆるひし給ありも有るんとおひうる
ワりうるやうちるも心ぐるしうて、さ後まくらし
へ笑ふ給、（大詞）りうる此心の母ど氏おもうで、あやしき
まで、さうしなれまゐる氏、ゆくおき袖のいろなど、
うあらしし給こゝろあさるまゝ、ぐりうのいふかひ
なきもおもしるくまゝさ後ぐなぐさむりなくと
うらうてなる心もなくやつれぬるすゑぞめれ
母ゆげをぐりしなるくまびしとおまどひぬるり

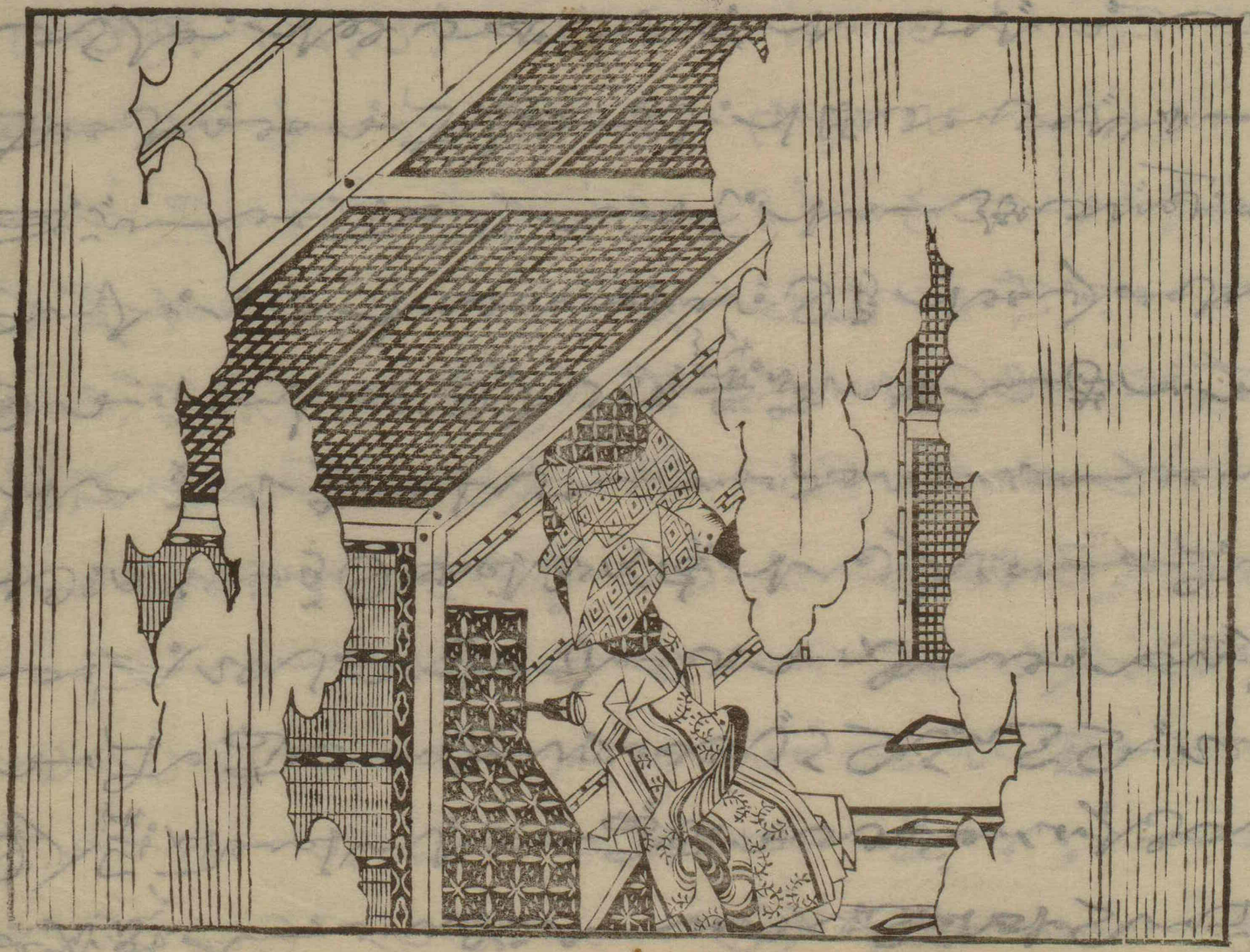
のれかくまさしへぞそくかりそめよそひかし給
へりぞ（た）やうがうれいとうだしく白ひて志きこ
のいとこちやかりかほれかけらひもへ（並ん）よりはぐる
ほとけをも志きこ給へる此心にて、ひづらりし
くすこぞめれ今さらにおりかし心いられしこ
やうにおはくしたり。志そめしにさがふべかれば、
かいこちなくしん（一回忌るとてと之）程にこれ此こころにもさうとも
すこしこゝこ給ちんちなどをめてのぞうに志ちし給。
秋の夜のけらひはかくしぬ所ぞにをのづから衣
おほかる後まして夢（うね）の嵐（あし）もまがさのむしも心
ぼそげにのこるくけるさうづねちまさにれ此物ぞに。

時(たり)ぐさしいへんさまへるさ海。いくしまとしろおほく
めやすし。いぎたなりつゝ人ぐいかうなりかりと
そしきさりて。こゝろいりめ。こゝや(ハリ)の(大ん)給しき海など
おぼし生るまげまなげ人ハ心のほかまかくあ多
まじきこともこゝろへきけざまこそくと。ものくこ
かるしうて。水のせとまなげ(洞ノ)れそふらちまゝ給。ぐり
なく明がたまなりまかりぬとものへぐおきて。こは
づらり。馬どものいぐゆりとも。さびの(葉ん)やぎりのあ多
やうなど人のかたるおぼしやられておりしうも
おぼさる。ひかりこしつゝ身のさうじをましあけ
なて。宅のあられなりをもろとまゝ給。女(大)もすうし

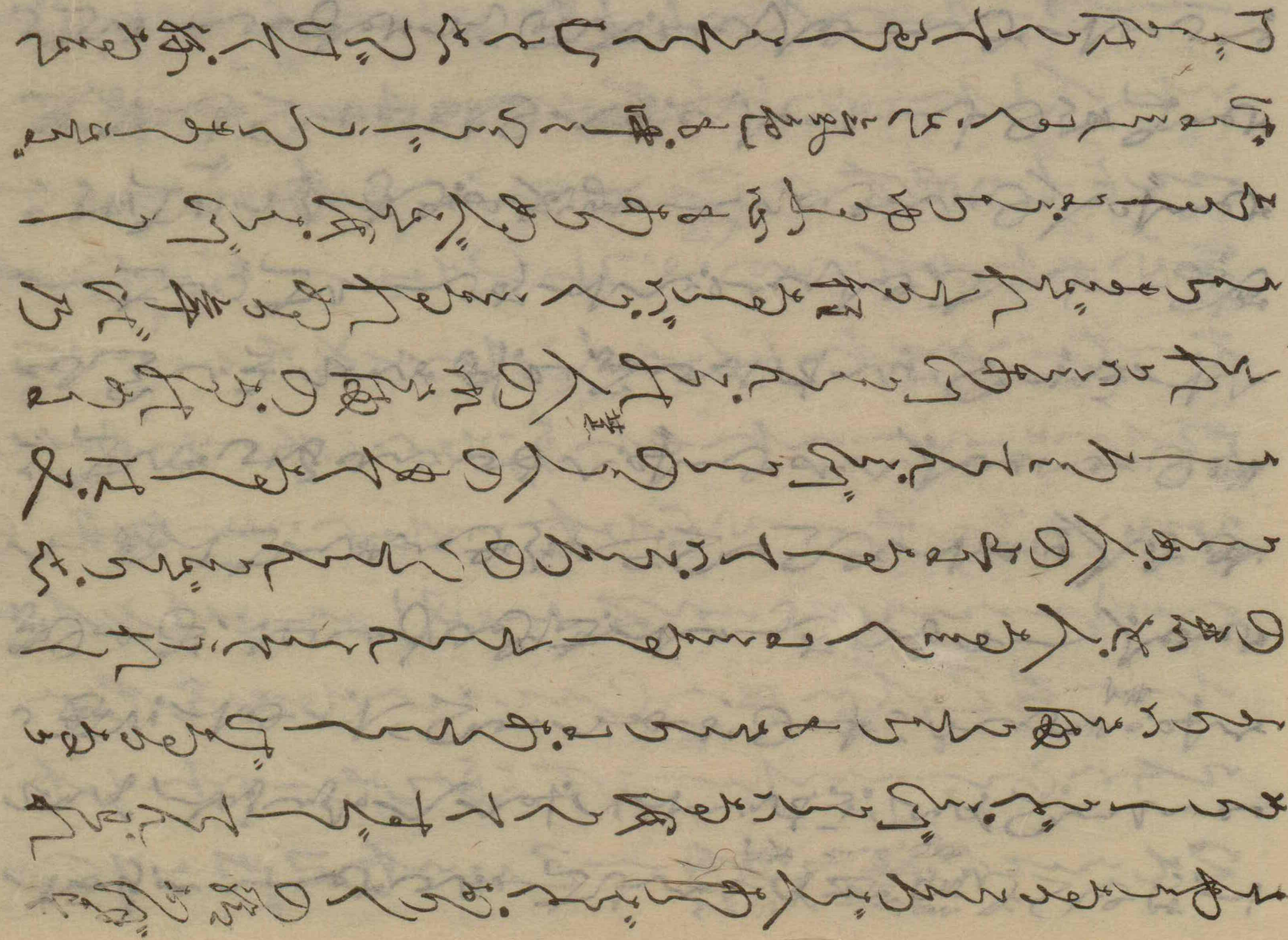
おざりおはへるまゝほどもちかき軒(のき)のちかさるれば
あふの番もやうく老(ひ)てまで引(ゆく)ぞえり
いとえんちなる庭くくならずせず勤行のよはちなくてぞ
くやうまなほどもおろかならず心まかせてあそび
ちかまき世の有様ともてあはれんずる庭
ほしらとよろこびしく庭きでくるべひゐて
おへばやうく大仏おもろうしきもおもえきて御ほどいと
うきるうて御人ぞそくちかきしば庭ことより
心の人ぞそいさしまあかまでくるんとうゐへ路
おくなりゆきむし鳥の立(とう)ち庭よふ松風(て)ちかう
きゝ由ふ夜かきとあし元続(名)の書きすゝむゝひぐく

大ん
いまだまいとゝぐるしき紙と。いとゝまりちまうも
げりしげるあぼしたり。蓋詞ことありがたは朝露(あさつゆ)も
えぶ(まけ)詩まじ。文人いりぶせしたり字ゆべき。例(れい)の
やうにちぐらうにもてなさせなて。ぐぐ世にこゝが
ひたることにて。いまより後もこゞかやうにしれさ
せなてよ。らまようしろめたき心いあらじとあぼせ。
りぞかりなかがちなる心の程も。衣とあぼしたるぬ
よそかひなれとて。出給りんの音色もなし。大おさ
ましうるいなんとて。いまより後はされぞこそ
もてなし給たんまてにあんん。けさいまゝ字ゆるう
しるがひなへりしとて。いとすべなしとあぼし

さればおかしや（芸句）鶯の羽やまぶきちぬこそは
てげるまどひめべきことゝちげさぐちちり。まけ鳥
もいげうるようおしんはのつるとゝちすかる。京おゝ
まひ出しる
（芸）山里のあはれはしうし声ごまとりあけめ
ふるあさばしけれ。かか君
（大）鳥の声も聞えぬ山とおもひしをうまう
なごしとはさづけてさるなり



薫
さうじぐちまでとくりなりあてゞべり
しのぐちより出て。ふしまくれどもまどろまれ
ず。ござりけるあしうて。いとゞくおもはしからば
ごろも今まで心のどろみまじやみずらん
ことも抱うく覚え給。姫君(大臣)は人のおもかけことの
つましさ。とかくおもひうちふされ給ふとぞ。
これよりこそ人みなて世をおもはの心うさをおう
人ごとくうちしぬことなるやゝやとうさぐてり
たまひけり。かひいづめつまごころうりはくれ
ありぬべきこまかめりと。おぼしめぐらすは薫人の
わけるひ育ちのうちなるしく八おうつがしく。若宮も



がちまてあしぬへるまゝ名おいとなやましければ
なれ君のつしまへるおくの国にそひゆし給例
なるぞんのさくめさし氣父もおやしとこれ君ハ
おぼしつれぬへるまゝにくておりしされバうれし
くてれぞひきくせなり給ま前をきれうひ皇
香のまさるべくもあらずくゆりかゝる心ちとれば
夏ねぐがもてあひかひけんしあはきられて夜こと
なるべしといとおしうてねぬるやうまて地もの給
とぞまらうとハ舞のおもとよびいでゝまて二夜か
まうしひとされせうそこすくしきうつしとき
てしぬひぬ総角をさんれにとりなしも心もて

ひろがりの備も對面しけるとや此宮（中）もおほせ
らんといらじうとづしられば心ちあしとてなやこ
ろしは給ひ人ぐ日（八ノ一回ノ夕）のうりなくなり給ぬ。そう
ぐうしうとなるまことにぞ。又つうまつる人も
なきまおりあしきれなやこうるとまつる。中の
君ひとなどしとてのて心がなどはえとそ心より
侍しねと。をめて罪人のへばくしう奴ぬりまぶれは。
天おきのてがろともはむすびなどし給。中納（慧）て夜
ありれつとあれど。けきよりいとなやましうなん
とて人づてまぞ罪人給さもこぐらしう。けりく
しおもすと人ぐつぶやきアカ。此（姫達）づくなど

うれしうて。い夜ハまぐこゝゆげる人もあるゝなれ
心よりしづさゝてこゝ罕て給。れ(葉)人ハ川(大ノ)こゝきて
給しかぢの衣もおらゝあぬへつゝん。ちまが月も
志げ心なくておりしより。例のやうにさそてんと。
又れせうそこあるに。心(大ん)あやまりしてけづらりう
おぼゆれぐとゝうゝきてしてさひて。對面し給ひで。
志(葉詞)ひのほりにころうきれ。人もいりるも
侍らんとれ文まて罕人あへり。今(大羽)ハとてぬぎ(がくを)すて
侍し程の心まどひに。中こゝしづゝ侍てゐん。罕てぬ
とあり。狼(葉)まびて例の人(弁)めしてよろづにのぬふ(内ノ人ニ)よ
にしてぬ心ばそされなぐさあるに。此君(葉)をのこれこ

ぞしさう人ぞなれば思ひまうるひかひてよれ乃
すまうまうけろひなどし給りんをいとめでたうな
べきことるいひあしきてさぐいれなしんとこれ
りたしひあしきをそり娘（大人）君そのそしきをばふりう
としつも給ふるどうきりけさそ人めしなりけ
給めるまうちとけてうしろめたき心もやあしん。
せうし物語なも心もそやはとありがうことも何
めるうちさくまじきは人の心はそあめれと思
ひよりのひてぞめてうしくいふれ（中）きこえ後
なしいぞんをとりざ後なしんまてぐるさそても
こそめてはあさまうまはまてなすまじきこうろ

なめるとまして御のまもしき稱(みめ)ていなぐさこなん
よとまいでくいそでかはふとさること浅まちと
家人のあしんぼいまなんあしぬとうけひく
氣色のしまかなるハ人の心もんとをあい
なうおきさうにやなぐつゝ給なるんと御し
まゝなるとそしきぐるしさ給ずいつこもやえ
んとをつゝていとおしそれがよろ(中と)げまうち
ろこらひて背(ひし)の御(ハ)をもむけも世中をくこころ
ぼそうて色しまつとも中々人まゝへまうるぐ
しき心つふなくどれ給をさしをかもしし
よれ御ぼしまてどそなひの御心をこぐりし

いふかひなくしかりけんといまもとてきこゆなり
の給しひとゞもすゞろなりゞへしとも侍れどもふ
ぼそくおぼしもゝさるぶるめきざいんでのおやまつり
心ごころなる御心にはくむめつこそいはゆるなるれけま
このこやうのあれともすぐし給ひけんもあはけなく
有月日はえてもれ中ノことのきこえあくしう
ころかくしうらし御心ちをともいかゞ中ゝる
とれつるはまてうしあそかうあの有様もなる
ゞくちくおぼさむとかうこそなるさげやともあて
おん人ばいか中んなるあはすることぶうくでひと河わさのま
やはきてよるまでおん人ともて給けんなうぶし

しくもあしめ身れうしろめるさいぞそひさ
やうにそあげされたありしが心ぼそさはるぐさめ
まはかう朝夕にこなりにいかるるかかとたり
向うしめしくしぬれば大ん げまといとあしうてな 何
とられかれうたてひがくしたき物にいひしたべ見
なに付てしこぞれ約ぞやといひさし給つくれ
ひに苦まらうといかり給りば大姫君いとむつしと
あげまと弁ごん氣てはせうそこどもつくへてうし 苦ノ
こ給をことしたりなりにしとつぶくとさしぬれば
大ん いへもし給たずうちなげきていかにもてなす
べき身にかはひと取おもせましかばともかくも

さらべき人まあのかれなりてずくをといふなり
うるまつけて身を心ともをぬよなれば云れれいのこ
とまそこそは人ひしんなりとがをもうくすなれ
あるかぎりの人は年つもりさしげるなれが
おしはしてこころをやまてまつかくしげるな
ことは罪しきしとれどこはくらぐきさことかは
人めしかしぬ心どもまてさぐ一ろまいふ
こそとこぬへばひきうごかしのぐりこさらく
あへるもいとこころうくうとましうてどうぎれ
給ひずおちじころまなまごともかたひ罪し給
ゆかれ志もしかるすぢまはいますらしかもし次

おほとうまてなまとも云て入給ものがおやしうも
なりける分かなく、こゝがおくざ夜よむ、さてかかす、例
のゑこのれぞどもなりうへよるぞそぐのし罪
いへれさうこゝろすべかめる気色をおきまして、
けよ何のさとり所かはあしん、ほどもなくてうく家
れすまねのうひなさ、山ちしの茶ぞ、のがれん
うさなりけるまのらうというくけぞうよこれかれ
まもくちいれさせず、志のびやりよい川ありそめ
けんことくもちく、もてなしてこそと思そめ給
けることなれば大ノけうろゆうし給ちずそいい川もく
くてすぐさんとおぼしのまふを、みおいぐ年の

をのがぢくさらひて、けぞうまさくめさるどす
地さはいへど、ふくらぬけるや、老ひがめるまや、いと
おしくぞこゆる、大心ひめ君おぼしつづくひて、弁が
来れるまのあふ、大詞ぞしばも人まくぬれころよせと
のこの給ひたりしをとくをきいまとなりてはよ
ろづまのうちなくこれこそてしてあやしさま
でうちとけまたる程、ぞひしまたぶふさ間ケ家は
心ぞへのまじまて、恨給めるこそつりなかれよ
人めさてあらまほしさまなるべからんことを
ちまかはもてもなれてもいはましされど若より
心ともなれそめたる心まそいとくるしきをこれ中君の

さうり色給たんもはおしげなうすまねを。さぐ
しれ（中ノるすと云之）ゆうりは取をくのこおぼゆる紙。まことなる世か
しとおもひきこゝろ給うろざしなるしがおなじことな
ふなしぬへかし。こ紙かさうこゝろのうちもこれ
ゆつりてこなたん心ちなんすべきなる紙かやうり
よろしげに笑てなされよとぞらひさう抱かう。
あるべきさ海をの給ひしぐられば（舞ム）いと哀とゝんなり。
さ（刻）れこそはさ紀ぐもれ氣色をこゝぬふれば。いと
よくこさてしさすれどさは（慧ノ）えぬひあらしむまじき
白 兵ゝ宮のれ恨（うらミ）ゆきまきりめれどまことそなる
さ海はいとよくうしろこさてしんとなん。こさて

ぬふそれもしふやうなるれことどもなり。ふる所
なるがらおりしましてことさらはいうじきれうろ
何らしてうしづき罪人させ給ちんはいうしもうく
也は有がたきれことどもさしつどひ給はざらまし。
りしこそれどうくいとゝろぎなげなるれ有さ両を
ミ生るはいかはなりもてさせ給りんとうしろめたう
なるしうのこゝ生るを。後のれうろそしりがたけ
れどうけらしくめでたきれすくせどもはこそ。
おりしましそれとなんかけぐおもひきてゆる。
右家のれ遺云（ゆいごん）さがんじとおぼしめしそうしは
とゝりなるれどそれはさるべきひとれおはをぞ。

それほどなしぬことやおりしまさんと常して
い夜しめ罪しさせ給めりしまこそ此夜のさやう
なる心ぞ人抽し給ましかばひとところをうしろ
やすくこそさきなりていかようれしかしましとおり
ありの給ちしし抽を。ほどくにつけて。心ふ人に
とられ給ぬる人ハこうさもくだれるも心のほかに
おるまじきさ夜に。さすふさぐひごまこそおほく
給めれ。それ乳例のことなるめれば。もどきいふ人も
給しぞ。ましてくだりことさらにもづくり出ま
ほしげなる人の此有様に心ざしふかうありがる
げにきこし給をおるがちにもてなれさきぬて。

おぼし<ruby>悪<rt>をさ</rt></ruby>つるやうに、をとこるひのほいをとげぬ<ruby>ぬ<rt>とも</rt></ruby>
さりとて<ruby>雲霞<rt>くもかすみ</rt></ruby>をやはなるべ、すべてことなほくやつで
くれば、<ruby>いと<rt>大ん</rt></ruby>しくしつて心づきなるしとおぼして、ひれふ
しぬべり、中の君もあいなくいとなしきれ氣色
なるとこなり給て、もろ<ruby>共<rt>ま</rt></ruby>に例のやうにおほとの
ごもりぬ、うしろめたういかにもてなさんと覚ぬべ、
とさらめきてさしこもりぐらへぬへきものく
ら庵ごになるきれすまねなれば、なよくなかしき
れぞ上にひきてせなりぬて、まぎけちひあつき程
なれば、すくしまろびのきてかしぬべり、弁ハのぬひ
つるさ庵を<ruby>まらう<rt>慧ん</rt></ruby>とに手也、いかなれば、いとくりう

しもよ我心ちるれ給しんひぢりぢちのやりし
あらりまて。つまちまさ抽ま心しりのへるまやと
おほすまいとゞ我心まかまひておぼゆれば。さりし
ぢちまて見しず。さしはもれぢしちまでまも。しこハ
あるましきことまおほしるるまきハあるれ。と取
ぢりおほとのごもるしんあらりま心のびてさぞ
れとのまへば心(川冬)して人とくしげめちまど心しれ事
どちハしひりまふ。霄(よぬ)すくしすぐる程ぞま風の音何
らくまうちかくまはるまきさ夜なりしとき
なぞハひしくとまざるをとま。人(黒)の思びのへ事
かるまひハえこさくつけ給りどとしてやとしらち

びきいりおなじ取ほおほとれごもれりとうしろ
めてしとしへど。つねのとなれば。ほかへまとも
いりごさうえん。れけらひをもとじくしりぞ。
ミなりぬへつらんとしけるよ。大ノうちもまどろこ
と度ちのばかと罪ぬてやをしおきしぬぬいとと
くたひかれ治ぬるよ。何ぞろもなく孫いりぬへるを。
大ん いとくおしくいりますりわざぞとむひつぶれて。
もろともまかれなぞやとおもへど。さてもえ立
かへられで。けなくくしくこうまへば。火の国のか
なよ。禁うちこさすぐるまでいとなれば。ほよ。未悟乃
るびしをひきあげていりぬるを。いたんこうつと

おしくいかに覚(中ノ)し給ふんと思ひなげらおやしさ
りべのつらに扉風を立ちうしろのむつしげ
るるにねぬひぬ。おしましごとにてごまつらしと
思へまへるをまいていかにめづらかにおぼしうと
まんといと心ぐるしきにもすべてたらぐしき
うしろみなくて落(おち)とまかり身どもれなるしき紙也
ひつぐけぬふに。いまはとて山にのぼり給しり(ゆゑべ)の
れさ夜ちどこに今の心ちしていとじくもしくなる
しくおぼし給。中(蓋心)納言ひとりかしぬへりとこうろ
しけりにやとうれしくて心とさめさし給ふ
やうくおしらざりやりとこう。今すこしうつくしく

らうたげなる氣色ハ海さりてやと芸も。おさまし
げまあきれまどひぬへる波げまこころも志らざり
やりとこゝあれバいとくおしくもあり。又なし久
して。大ゝ。かれぬへらんつらされ。まめやかに心うく
ゆゑやれバこれをもよそのゆとハえ志ひそるれまに
それど。猶ほいのこゞらんくちおしくてうちつけ
まあきかりやりともあぼしなしに。此一ゆしハる波
すぐ志てつゐますくをれかれず。はこるゞ海ま
るらんも。何かはこと人のやうまやはとおもひさ海
して。例のおしくなつしとさ海まかるらひそ
あし語つ。地。いべどもハ志そしにいとおもひそ

中の君にいひてまゐおいしますらん。あやしさ
けざかれと。さざりあへり。さりともあるやうあらん
などいふ。犬なる例のことなりは。しはのぶりこちして。
かぐらうあれはこまほしさはしさ有様を。
なんそいとゆくもなれてハ常なるらん。何かこれを
世の人のいふめり。おそろしき鉄ぞつさそまつり
こちんと。そいうちすきそおいぎやうなげよいひ
なす女あり。まるあかまがくしかその地が。川かせ
ゝ夜ちん。さく人ことをくそおひ出させ給めれば。
うつことをもつさぐしばよもてなしこそて給
人もなくおりしますよりしなくおぼさるゝ

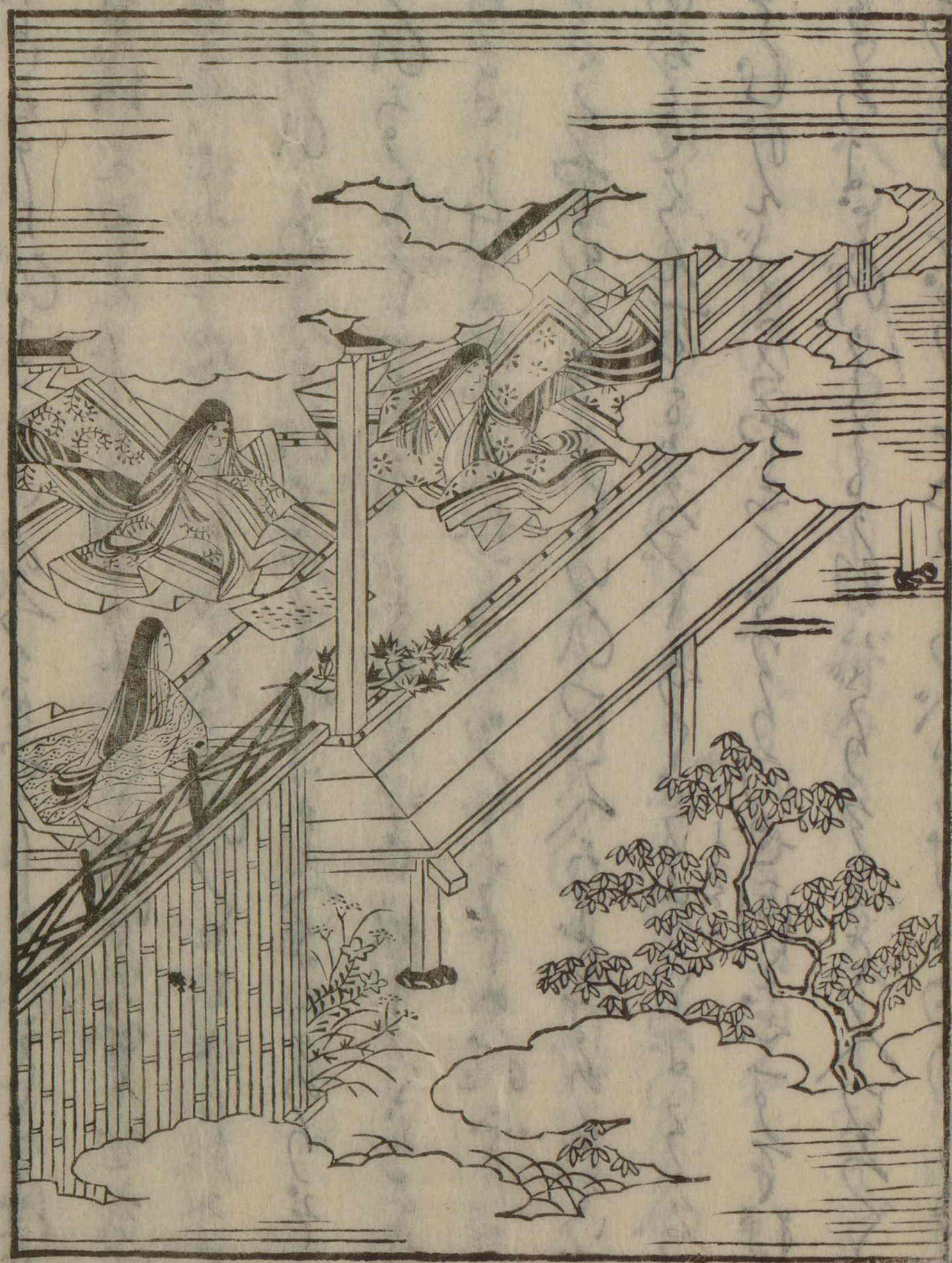
こそ。今をのげりこゝ侍りなれ給なるべ心字し給てん
などくらひて。とくうちとけてなまふやうにて
おりしまきなんと。いふくねりて。いびきなど。
くいしいくすりもあり。おふひ（苦心）とがらましもあら
ぬ秋の夜なれど。祥もなく明ぬり心ちして。いつれ
とけくべくもあらず。なる夜めしきれけれを。人やり
なしずあらぬ心ちして。おひ（汨）おぼきよ。いとこゝろうく
けしき人のれさ夜。こなしひ給なるよなど。のちきけ
贅て出給。我なるゞらあやしく夏のやうにおぼゆれど。
なほつれなき人（大）のれそしきい夜一こびこそてんの
こゝろに心のどめけく。間の出てかしこまへり。年

まりて、いとあやまちく、中の君ハいづくまかおり
ますらんといふ後、いとゞ（中ム）しくなつかけぬれそ
ちまいかるまりけんことまゝとおもひふしこ海へり
唯日（きのふ大ノ）の給しことをおぼしいでゝ、姫（大）君をつくしと
ぶきうゝ給、明（地）まけりひりまつきてぞ、かべ（大）の子
かれきりぐすさひ出ゐへる、おぼ（大ム）すらんことも乃
いとくおしかれバかゝるゝ物もいたれこ海たず、
ゆかしげるく心うくもあるかれ、いまこゝり後もこゝろ
ゆかびすべくもあらぬ世ことそと、むしぞれ多へり、
年ハあるゝまゝまりて、何さましかりけれこゝろ
づまさ後、さくあらりして、いとあまりふく、人まく

うりけることといとあしくむほれぬうり。きしる
のつしきはる後ありあうこうちしてよろづは
むるぐさあつる後。今夜るんまとまるべしく。
朋もるげけべき心ちすうすてぐくおさしとさ
まりこまへりけんそろぐるしさ後。むつ大ノ子ゆうる
こゝ文ひこゝつるま。月をもえおもひをつまじ久れ
けゝしきすぢいげくるもむきてしじう
きもけらきもうこぐまゑ忘れ給まじくるん。
白家をまどのもづしげるく男給める後。おもじくハ
心さくとむふうこぞことるもれし給らんと。こ
ころえもてつれバいとぐことをちりまもづしくて

まりて人ごまこしまんともねさくあんらし
くおこがましき身のうへぞ人まぐるもしし
給たまどゐんじをさそれいよまもいそぎ出ぬぬ
ながれ見をいとおしくとさくめきあへり姫（大ん）君も
いかりしつることぞもしをろかるろろも抱し
給たぐとむすつづれて心ぐるしそれがすべてうち
あれぬ人ごのさうしら後よくしとおぼせて。さ海
ざ海さふ給ま。此文（芸ノ）あり。例（大ん中ヘノ法約ノ文ヲ出ル給也）よりいうれしとおぼし
給もかけいあやし。秋のりしきも志しぐがれま。
なをさ枝（えだ）のうえいとうく紅葉しうる後
おもしじえをけさそそめけり山びめまいづれ

ふかき色とくたぐやさばかりうしつかしき
もちくことずくちまことそぞてぞしつこゝめんな
とそ大ム てちかとちくもてあしてやこちんとちめり
とこ絵も心さはぎそ。こくかしかましうれかんりと
いへばたきこ大ム しめへとゆづ中へんもうこそおぼえて。
さすがよかきまくおもひこぐれぬふ
やまび大ぬのそむろろハけるどもうけ
ろふかゝやふかきちりしん



（大ノ）ことなしひようさいのをつかが。おうしくこしされぞ（慧心）
なほえゑんじもいまじくおばゆ。男ほかて
なれど。ゆづり給ひしこそ。こびしくこしかど。
うけひうぬはまびて。かまへいまへるなありぞの
うひるくゞくつれなうしんもいとおしくぶうさけ
なさきもれはむをられて。いよくそうじめれむうなひ
ぐらやおんど。くいひつへなづすめうおいぐ人
のおもしろん所まうろぐなく。ぐらはらくはこころを
そむけんぐまくやなく。うづうの世間（よのなか）をおすてむの
こころまぐうげうもうれはざりぞりと。人ワろく思
あうるくを。まうしてをしるべうろすこ和のまる○ふ

おなじあたりりしかしまてくそぞ先ぐらん。いと
人まゝ人なるべしと母めきたるべしなれど。
まもすぐしたひありしのてまぐ有明の雲もかゝ
しき程に白芦の文のれたるに蓋まり給ふ三条のこゝや
やけまし後は六条院にぞうけろひのへれバちく
ていつれに系給と白人文もあぼしやうなれろら
し給ひり蓋ん まのぎりくことなくおらまほしきれ
すまねに。おまへの前栽せんざいかれまは似ぜおなじき
茅の婆すぐさも。末茅のちびきざ後もことにこなされて
やまと水にすめり月の新さへ忘るゝきたるやうなる
に。ぶつりもしるく。白おきなりしましかり。蓋ノ風につきて

吹くり白ひのいとしきくうちゆりは。ふと（白ム）それと
おどろかれて。れちをしなり。えぶれぬさ夜にひき
つくろひて出給。けしとのぼりもたてずつい居ぬへ
れば。ちる（白ノ）紙うへにちるどものの給ひで。うらんにより
ぬて。世中のれ物語アルかたし給。かれ（宇治ノ事）ひろも君
ことをも。もれ（白ム）てついでにはおぼしいでく。よろぶに
うしと給もひりちるしやえぶ（葉ム）のしの心にぶにかるひ
がたきをとしふくさもおたせちんとなりひちう
やうのあれば。例よりはまめやかにあるべきさ夜
ちどに給。あけぐれの（地）ほどおやまくにまりいたり
て。そのけはひひやくかるに。月はさりにへぶて

られて、まのあたりもらくなまめきたり。山里の
哀なり有様也。出給。宴（白詞）これ此の程よりなすぎとくら
し給ちまとりたらひ給とな（薫ん）ひ給ひづらひしがれば
女良（白とミなへし）菜さけり御門守ふ所ふきぎけり心をば
うやまめ給いつらんとこそふれぬ
（薫）きりかきあしこれ原の女良菜心とよきて
こゝろ人ぞこゝろなべてやはなんとおもはしまし写ゆれは
あなりしうまりしとおもてくはしら立（ごち）ぬぬ。年（薫ん）此
くのぬへど人の此有様といふなんとうしろめる
くしまうちなどもこおぞし給まじくとしたり
らく心ぞをのぢりとさりまうやうもやなどぞおや

うくせいたりしとちまごともはおしくはもれ
し給まじかありとせへだかれいとおしくうち
まちませさばかり給有様もこぶふやうちまんも
ちさけちまきやうちまりをさりとそさえこえ思わしこ
むまじくおぼゆればまづゆづり見ていづこの根
とをおかじちまどしこませかまふなこころともおり
給まで こころをばくとりちまし給もおかしけれど
例 葉詞 のかろうかちまりれ心ざ海に抱おもはきんこそ心
ぐるしかるべかれちまどおやかるにまちりてきそ
給 白詞 ばかしこのへかぞかりこころにとこちまんま
ごとまりつりちまどうとまもめやかまの名道だかけ 葉詞

こころどもにはさきやとうちなびきぬべきけしき
いとしずるん侍るつうまつりよろきこゝやげゝへり
とそ侍れやとておりしますべきやうなどこ侍ゝる
事をしらせ給ふ廿八日ひがむのもてまてよき日なり
それが人しれず心づかひしていとじくしのびて
ねてまゐ（明石中文）ささいの家などきこしめしいでくハ
なれありきいとじくせいし事なへだいやと
けげうちしき紙（白ノ）おちよおぼしうることなれば
さりげなくともてあつふもけりなくなん舟渡里（ゆなまさ）
なども取せそれがことくしきれやどりなどもかり
給ふず。それけうりいとちうきこゝさうの人の家ア。

いと思びて、自家をばあらしそてまつりぬており
ぬ。地ことがめそてまつるべき人もなれど、愛ねばそ
ひづりに出て何りくまも、気色たらせじとなるべし
例の平蕉言義おりしますとて、けいめいしあへり。
君ぞちる後ひづらりしくこそぬへど、うれろふ方
ことにまほりし遠てしかぞと、大ひめ君おぼして、中君は
せふることなるありしかば、さりともと思なすがら。
心うかりし後は、ありしやうにあの君をもおもひ
きこえし給ちず、心をかれてもれしぬふなるやかやと
れせうそこのこ罪をかなひて、いかなるべきことなり
とくぞもらるしがる。自やをぞれ馬まて、くらさ

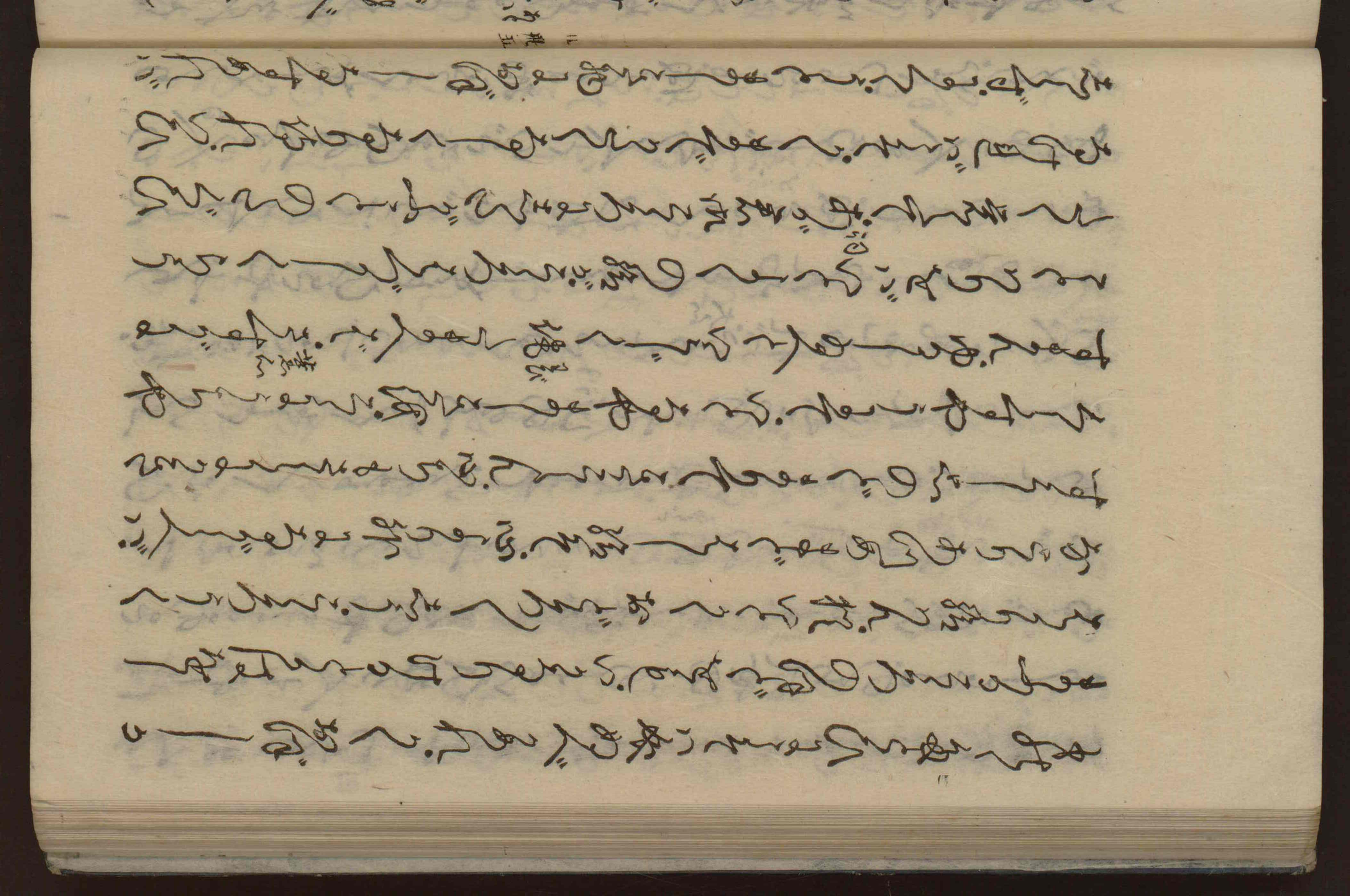
まぎれまおりしまさせこまふて弁(薫詞)めし出て宴行(こてもと)
まこぐ一ことこそしさすべきことなん行るをおぼし
もるのさ海こなりてしまいともづしかれぜ
ひこやごもりまてえやむまじきぼいまさばし
かりて成ありしさ海まはこちびきぬひてんや
などうしもなくかるこらひこまへぞいぶ(弁ん)かるまも
おるじことまそいとおもひて来りぬさなすんと
ことぬれば大ん されぞよさひうのりまかりとうれし
くて心おちぬてかれいり給べきこちまはあるぬ
ひさしのさうじをいとよくさして對面志ぬへり
一ことこそしさすべきがまこひとこさくぞりの

しらんハあやなき後いさくかあけさせたまへいと
いぶきしと罪しさせぬへど大詞うくてもいとよく罪しぬ
べしとてあけ給ちず大ん今ハとうつろひなんをふぐ
なしじとていふべきまやなまかは例なるぬ對面
まもあらず人まくいしへてよもふさじなど
しひて、かぐらりも出ぬへるまさうじのなるより
此袖をとらへて蕉ノひきまきていうじうこしれど
大ん いとうるそも有けざかれなまくきくいれつゝんと
くやしうむつしかれどこうしらへて出してんと
おぼして大詞ことへとしひけき給まじきき面よかすめ
けゝかるしひぬへるこゝろぢんなどいと衰なり白文ハ
をしへ罪しつるまくは一乗のとぐちりよりて

とし入里てつるまくまゝ一束のさぐちりよりて
扇をなるしたまへば弁も来りてこちびきこゝも
さゝぐもなれよけるゐのしるべおかしとおぼし
つゝいり給ぬるをも娘（大ん）ぎみハしり給ちでこしらへ
いれてんとおぼしたり（薫ん）おかしうもいとおしくも
えてうちくよころもしらざりけるうらこゝ給
かれんもつゝさり前ありきこちすべかれぞ（詞白）こゝやの
しるひのひつれがえきこしいるびでこゝまおもし
つる者もきでこそまぎれ給ぬれこれさうしぶろ
めるへやうこうたれなりぬらん中宅ま人ハ人
まも女詩りぬべきかるとのゐふま今（大ん）すうしむよりぬ

ことのめもあやに心づきなうなりて、かく(詞)よろぼ
はめづらかなりけれこころの程をしらぐいふかひ
なきこころおされさもこしなりはけるをこそりは
おぼしあかづるにこそそこいたんすなくおもふ
ぬへり。今(業詞)はいふかひなしこしくちりは無く罪しさせ
てもあまりあらばつゝもひもせこまへやんごと
なきかたにおぼしよろめるをすくせなどいふめる也。
更(さら)にこころにかなはぬものは侍めれば、かれはこころ
ざしにとは侍ければ、いとおしく心にまゝかなり。
かなはぬものこそ遂(とき)所なく心うく侍れ。程いかぐは
さんにおぼしよりね。これをさうしのかため

ぢうり。いとつよきも。歳ことに抱ぎよくをしたうり
罪ゆる人も行らじ。志るべといぎなひ。なへる人(自)の
此こころまも。歳さまかくもねふるがりてあるすん
とはあげしなんやとてさうじをもひきやぶり
ひべきと氣色なれば。いたんかるなくころづきなれど。
うしらへんと。忠志げあて。此(河)のなふすくをといふ
らん事ハ。めよ事こゝしぬことまて。いかまもしくしひ
さどられぞ。志しぬ。泪(あまぐ)のこさりふるがゆらして
なん。こはいかまもてなし給ぞと。爰のやうにあき
ましとさまのちの世のこあしにいひ出る人もあらば。
昔物語などにことさらにおこめきて。つくり出くる



きてんかるなりしいとゞ世に伝(あと)とゞむべくなん
おぼしめとて。さらバへぞてなぐらもさうしさせむ。
ひさかるなうちすてさせ給そとて。ゆすしなり
なへれバ。大ノ(たゝ)ひいりてさすがにいりもらて給ちぬ。
いと(慧心)哀となもひて。(詞)がぐらりのれけちひをなぐさめ
まておしゆらん。ゆめくと思てうちもまどろ
まずいとゞしきさ水の音にめもさめて。東坐此
あらしに山鳥のこゝちしてあしかる。給れいの
明のけちひに。瘴(かね)の声(こゑ)ちゞ思ひ。いぶるなくて
出なべき気色もなきよと。心(大)やましくこハぶらり
給もげにあやしきけぎなり

蓋しかくをし試やかへりてまどふべきこころ
もゆかぬあけぐれのほ[詞]かうらあし世まありけん
やとのあへば[大]心からまうくぞきくあふ
[大]かくぐまくしす心をせひやれ人やまるぬ
ほまどとぐとほのるの絵を[蓋に]いとあぬこころ
されば[詞]いかまこまるうへぐまて詠めれば。いと
わりなうこそなどよろげまうしけほのぐと
明け程ほよべのこゝより出給也。いとやもしかり
かうまひなしあへるまほひなどえんなるれこころ
げさうまハいひしてずしありあへり。わびべどもも。
いとあやしく心えがらくおもひまどもれかれど。

いとあやしく心えがたくおもひまどはれけれど

さりともあしざ海なりけころあしんやいとな
ぐさめたり。白ん くらき程はといそぎ帰りぬふ。君の
程も帰りさはいとちろけくおぼされて心やすくも
えりけりはざらんとのうほていとうしき波。
剣をやへざてんとおもひなやこ給なりまぎ人
さはがしからぬ船のほどなりしつさぬらうつり
れ車よきてあり給ことやうなる女車のさ海し
てかくろへいり給ま。蓋と白とこ えれましひぬて。白伺 ぎろかなる
ぬ宴（こやづえ）仕のれころぞしとなんしぬふかとし給。
蓋ん しるべのおこがましさ波がいとゆきくてうれへも
いとし給はず。白 宴はいかしとれ文なりぬふ山里はハ

れ
誰もくうつの心ちしき海ちず。しこごれこまへり。
さまぐ中ん
持しまおぼしりまへける波父まも出し給はざり
けること。うとましうつしく。お大○ぞんをばしきえて
あてめもこあはせなり給ちず。しこ大ん ざりし海をも。
さはくとはえあきらめる海ちでことちりり
うろぐりしくしきえて給。人ごまいる御しこる
るぞ。れ大ノ氣色こなれど。おぼしほれたるやうまて。
これもし大ぐのおもすればおやしきつぎるとし
あへり。れ大ゆこもひきとさてこせなりこまへど。
中
さしまおきあがり給ちれば。いてひさしく女ぬと。
れ川りひまびり

由よれつゝ日にしひやすくん霧ゆきの雪のさく
原分てきつるも。大ん りさなれたまへるすゝつきなどの。
ことさしまえんなるも。火なるにけてこ給しに。
おかしう覚てしとうしろめたう抱おもひしくて。
我さうしべまてきこてむもいとけくましかれば。
まめやかなあるべきやうをいとじくをめてりくせ
たてまつり給。しをんを色の目そなが一りさ日にこん
がさ日のちう夜ぐしてのふれけりひくりしげに
心えれば。けくまをて。とともなる人になんをくせ給。
ことくしきれけりひにもあしぎれいなれたまふ
うへけりになりことさうにまへにきしきゆきじと

あばしそれだ。よべのさしがりしおいべのしわざ
なりやうと。抱(白ん)しくなんきこしめしけるそれ衆も
れしるべ(蓋)さまひさまへど。冷泉院(生ぜい)(薫)りなるらず
さましぬべきことなれどとてとまりなぬ。例(白ん)のこ
かくよみれて。すき(世をイ)海じげよりほかもてなすとよ
くあばしいぐ(大ん)をもんはいなしざるもし事(こと)
とてどろかまやそとしよりなて。れしつひな
どうちあるぬすこかれさ海なれど。さる方まおかし
くしるして。まちこきて給ひり。ぞうかなるれ中
こちほいそぎおりしましこりけるもうれしきわ
ざるるぞうかあやしきさ。さう(中ん)じこれまもあしぬ

さ夜にて。つくろはれなり給ひまゝ。れぞれいたく
ぬるれば。大さうしびとも。うちなきけり。也(行)中ーは
ひさしくもとおぼし侍しのが。明營のなぐめにも。
さぐれことをのみなん心ぐるしう。思ひやるに。ひ
んどもよりなべ。さまゝ夜のことゝ。さくにくさまで
いひ志しすめれば。年へたるころどもにはさり
ともられことゝりをもさりたるんとうぐ志くも
あらぬ心ひとりをそくてのみやハみなしん
と志ひなるやうもなりうしと。ぐいまうく志ひも
あへずそづしきことゝもまゝ。えぐれおもふべくと。
さしも志ひかけ侍しぎりしに。これやげに人のいふ

めりのがれがたきれ契なりけん。いとこそくるし
かれ。すこしおぼしなぐさまなんに。志らざりし（白ノ入給ふなり）
さ夜をもきこしん。すくしとなおぼしいりそ。いと
もぞえんと。れぐしをなぞつくろひつきそのへど。
いへ（中ん）も志給ものど。さすがよくおぼしののふが。
げよう志ろめくあしかれともおぼしをさしこ
を。人口へにこぐうしさとそひてこあいかれ
なんがいらじさ夜。ふろづるせねのへり。さう（白ん）心もな
くおされたまへりしけれひごる。なべてなるず
おりしかりしを。まいてすこしよれつゐになまよび
のへるハれこころざしもまさるにこそやすくう

よひたまはんざらん。山道（ミち）のちかけさも。むかいて
まで おぼして。心ふかげにかたらひたれめ人ど。
あ（中ん）たれともいかなともしひつき給ひず。いひ（地）たらず
しづく。地のひめ君も。すこしよれつゝの人げちか
くおやせうとちぎいひつゝ。人のたゞずまゐをも
こちれゐるは。まれたゞしさもおそろしさも。
なれめまやあらん。家にあがめさしも家ひとしそ
なれ。かく山ふかきはあたりなれば。人にとをく。地
ふくて。なにひゐる心ちに。おもひかけぬ有様の。
つましくたづしく。なるにどもよれ人にてず。
あやしうねちかびたんかしと。ちかちきはいへ

まそもかひいぞんりとあくつてこそすくり。きりハ此君
しまぞらりくさくりどおもりとのまよひこし御
きりおへる。三日ままろ乗ハ。まちゐあん上臈と
人〻のこきしあれバ。大臣さしまさりべきといそひ給
こともしそなとおぼしてれ。御前まゐてきこせ給も
さざくさりかりハおとこするぬてときこえて給ま。人の
こりきんてもさぞりうれて。おまてうちあつめて
おそすりさ海。りとおりしげるりぐ。られりこ心ずや。のどりま
けりうき抽りし人のさめ義まあさけしくしくぞ
おりしけり。中納言殿より。よべまいんとちまへし
きど。宇治のめづりへのらうもきしるげるあめりせりま。さりか

ぬへうしこそてるんと東はざうやくまやとしてまん
れど・それぬ所のもしらるげに侍し・こぐりごち
いとぐやすらんで・やすらもれ侍らと・こちのくまかな
に・おいつきかきまて・まうけの地どもこまやかな
ぬひなどもせざりけり・家をしまきなどしつ・こそ
びけあまるかけごにいれて・おいぐの許に・人ぐの
れうにとてまへり・家の(女三)れかるにまさふしひけるに
ちるがひて・いとおほくもえどりあつめ給はざり
けるにやあらん・こぐなるきぬあやなどしるには
いれかくしつ・れれうとおぼしき二ぐりいと
きらしましらるほひとへのれぞの袖に・こぐいの

ことなれど

（薫）さは衣のそでなれとはいちずさともりでと

かゝりけずしもおしじとなどし思しめぐり。

（大ん）こちするゝるゆしげなるきれことゞもづしう

いとゞこのそでれりくりなむもいうぐこゝろんとおぼ

しわづふほど。御使（つかひ）くゝへかはすけうくれなり。

はやしきにもぐへをひくえてぞ。れ思のふ

（大）へだてなき心ばかりはかよふともなれ

し袖とはかけじとぞおもふ（大ん）心あわしくおぼされ

あくるおはいとゞはかなく思ひおぼしけり

あとゝまかりまゐ給ひと（薫）いひつゝ衣ぞかあまり給ふ。（白ん）衣い

その夜内に来りまして、えまりで給まじげなる後、
人しれぜれころもそしまして、荒しなげきころに。
中宮（明石ノ）なる（詞）後ぐ独（ひとり）なりしまして世中にすいぬへる
れるのやうくさしゆるなる後いとあしきとなり。
ちまごとも抽これまりしくこそこそ心なつひ給そ。
うへ（今上）もうしろめたげにおぼしの給と、望ずこがち
におりします後いさめきこしぬへだいと（白ム）くるしと
おぼしてれとのね所に出ぬて、れ文をきて生れ
ぬへる。名前もいてくうちなるがめておりしまする。
中納言（黒）の恵来りぬへりそ（白ム）なるこの心よせとおぼ
しば、例よりもうれしうて、いかゞすべきいとうく

くらく成ぬめりをうろもうぶれてゐんとおげり
げるおぼしたり。よく（薫ム）れ氣色をこまらんとおぼして。
（詞）日ごろへてうく氣りぬへる紙。こゝりひさふらせ
給ひていそぎまゐで給ゐん。いとゞよろしゝぬ
ことまやおぼし四のしさせ給ひん。ぶいたん所のる
まてうけ給ひりつれが。人しれずけづらりしき文
づへのしるしまおいたきゝんぐうやたべんと。
ゐのいろぶひ給つると申さまへど。いとしきる（白詞）
くらぞおぼしの給やおぼくに人のとりなすと
なるべし。せるとがめありぐりの心におるまごとる
かいつゝふんすべて所をきゝ男のほどこそ。中をなるひぎ

なりそれとて。まことまいとちしくさへ思しけり。
いと（薫ん）おしうこなりまひて。おなじ御さまがれまとそ
いおもすなれ。こゝひのけこまはかくりまそして。
身をもいさづくまなし侍りなんかし。ごとくの山は
馬はいかゞ侍べきいとゞもおくまさやさまり
所なりしんと笑しまへば。さゞくれまくれて。ふけは
けり東なれがおぼしまびて。御（白）馬まて出まぬ。御（薫行）
とをまは申こつふまつらじ。御うしろこをとて。
此（薫）君はうちまさふしひまふ。御（明石ノ）中ゞ宮の御うしまに（薫）まり
まへれが。宮（白）は出給ぬなり。（明石中宮詞）おさましくいとおしき
御さ海れいかまへこなりしん。（今上）こへまさしめしてい。

いさめことしめが。ふかひちまことおぼしの給ひて
ちりちなれどの給ひけ。おほく家ちのおとなび
さくのひとまへど。大家ハいよくわくおりしさ
けらひあん波さり給けり。女一家もうくぞおもし
ますべかりい。かきまんありまう。かぞりりまても。
まれちくれど思ぞなず字せんと長なおぼゆ。
すいらんのおまふまじきこころつみんもう
うやうあるれちうしひのぎすずなけど浅うしび
いりもちて心なくおすぬありのことあるまんうし。銭
ころのやうなひがくきこころのさびひやハ。
又せらなあべかめかぶされずなあ浅うざことそめぬる

あたりはえとそしたへねとせぬたまへりざふしふ
恨(うぎり)の女房のうち心ざ夜いづれとなくひろびたる
なくめやすくさりぐくおかしき中にもおてに
すぐれてめよとまるあれどさしまくこぐれそめ
じのころにていとさすぐにまてなしぬり
ことさしまこしきしがふ人もあり大かたちづし
げにまてきびめぬへるあたりなればうりべとそ心
ぐりまてきづめたれうろぐなる世中なり
それば色めしげにすくこころきたるのこころもり
てこゆるもある紙ざ夜ぐにおかしくもあれにも
あるかれと立てもあてもたづつ○なさ有さ夜を

むありき給りしこまは中納言殿のことくしげ
まいひなしめくりつる紙、東ゆくりまでおりし
まさで、此ゆこのあるを、されば、よしむつがれて
おもするに、東中ちうりなりて、あらましき所の
ことをひまいとも、ゆ所めしくこさらうて、白ひ
かりしうもいうぐとろうまあげ給りん、さうじ
うもいさくうちなびきて、忠しり給ことあるべし、
いうじくおりしげまさりとうて、ひさつくろひ
のへるさ所はまして、さぐひあらじもやとおぼゆ、
さぢうりまき人とおぼくこ給れめまぐまいうは
わらずとうちうりじめて、おぼくちうまさるま

あらずとかたちよりりじめて、おほくちかまさるを
しかりとおほさるれば、山里の老人どもはまして
くちつきまくげまうちゐこつくかくあらしさ
れ有様とおもひめるるさはの人のこなり給はましか
ばいかまくちおしかりまし、もしやうなるれすくをと
こゝろしつく、姫（大）君のれ心をあやしくひがくしく
もてなし給を、もどきくちひそこさしも、さかり色
なるさ風どもはおぼやかなる茶の気にまつかり
かしぬをさしぬひこさひ、ありつゞりひくろひ
なる姿（すがた）ぞのつこゆるされこうもなるさ紙こうこされ
もて、姫（大ん）君ワれもやうしくさかり色ぬる身ぞかし、
鏡をこうれバやをくは女もてゆく、どのがぞくは此

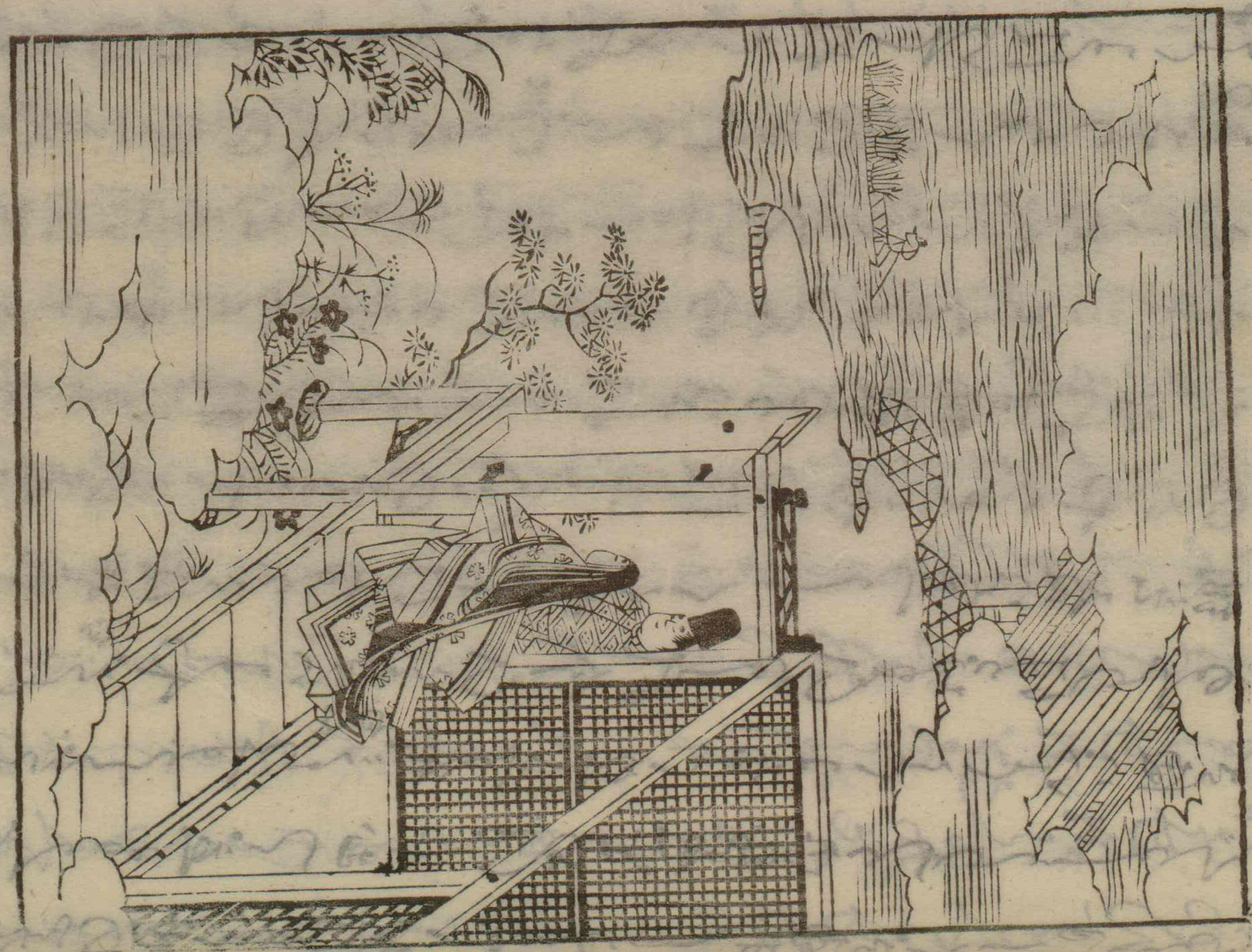
人どもく。我あしとやはおもへる。うしろでいしらず
がほよ。ひたいがこ紙ひさかけつく。文どりたるかほ
げくりとよくしてうちふるまふめり。けが身までは
まぶいとあれが程まはあらず。めもとれもなる紙し
とおぼゆる心のなしまやあらんとうしろめたく
てミ出してふしまり。ちづしげるらん人まこえん
とはいまくなるとちらいたく。いま一とせ二年ゆら
ばおとろへまさりなん。ちかなげなる身の有さ海
とと。れてつきのほそやかまからはく。おもれなる
をさし出ても世中をしつぐけ給。文(白ん)はありがたくり
けるれいとまれほど紙。おぼしめぐらすま。なる紙

ころやすうまじきことまこそそもと。いとむ
ゆるがりて笑て給けり。大宮の男し給しき海など
うちうちしなて。しるぶ（句詞）とぞしあらんを。いか
なるまかとおぼしたる。昔まてもをろかなるんに。
くまでもまいりくまじき紙。心のほどやいかゞと
疑て（うたがひ）。しこぶれ給えんが心ぐるしさま。こを拵（すて）てなん。
つねにかくハえまどひありかし。さるべきさき海に
てちかくつかしなんと。いとかく男しなへど。
（中ん）さしまあるべくおぼさるらんハ。とまこさくしれ
心のほどしるきにやと心をうれて。つがれ有様から
さ海ぐ抱なげしくてなんありける。明日程乃

宮ま。白いまどをしあけぬて。もろともにいざなひ出
てこぬへば。白ん さりけれるさ海。取からのあそれおほ
くそひて。れいのしぞつむ舟のうすりにしふ。流君
しら波めなれずもあるすまねのさ海かれと。色なる
れこころにはおかしくおぼしなさる。山のそのひかり
やうくこゆるに。中 女君のれからちのまほにうけく
しげまてかぎりなくいけさすへこらん姫君も。
かぎりとそはおりすべかれ。せひなれ我ならざ海のい
といつくしきぞかし。こ海やかなる白ひなど。うち
とけてこまほしう。中になるこうち寸。多の音なひ
なるかしからず。こ浴りしのいと物ありてこしける

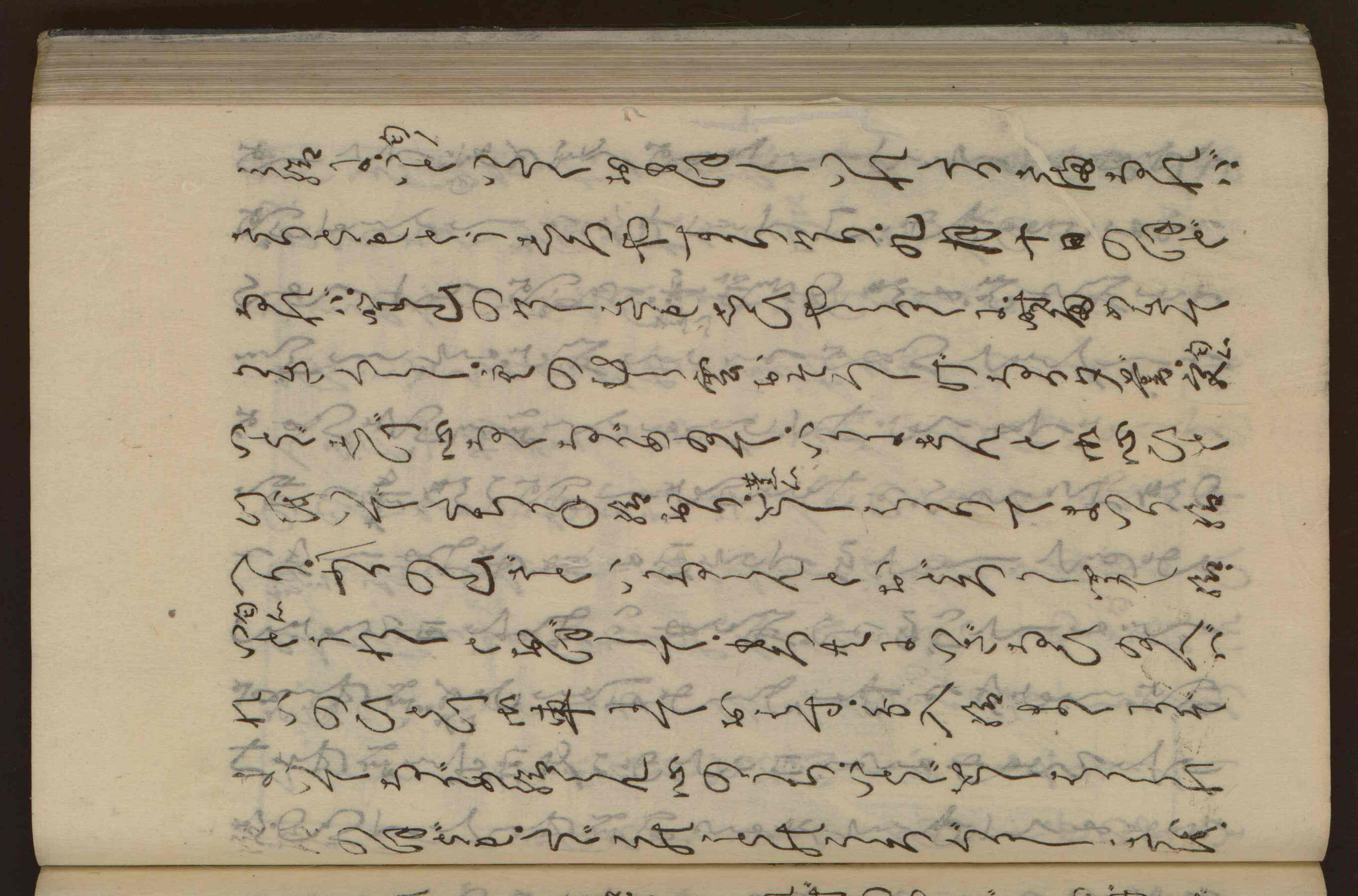
さうハあまぐさりきれゆけばいそぎあしましさ
岸のワたりと・かゝところまいつで舟さへあらん
あまぐ・うち涙ぐまれあへる浅・いとしもづしと思ふ給・
男の紀さ徳の・かぐりあまく徳めしくこきふうるまて・
此世のこなすず験しみめ思えしあへが・ぬふうしぐりし
こゝくハむあまぐらし・申こゝみめあれさうりし・中納言の
ちづしきまりハとおぼし給ふれしおまふゝこと
まそぶといゝくすこゝろえしこゝきえしまふくハ
げりしげあるりしまぐのそてまむ思えしハまして
うまあくまうゝまゝ・さづりうさ出給れ通しぐま・
つましく荒しと・ひさしうとぐて給ちんむ心

ぼそうしんとおもひなしるしも我ながらうしてと
もひしり給へどいとくこはづくりもよほし男白
れば京にかりしまさん程りしさるらぬ程ごまと
いと心あもしくしげまそこうろよりほかるんん
夜がれと夜とのゆふ
白 中さくん抱ちるしなくまいて姫のうしさく
袖や夜まよぬしさん出がてまたちくりけやす
らひゆふ
中 さしきじのワがこのこまやうぢ橋のとうけ
こ十と約つるべこ



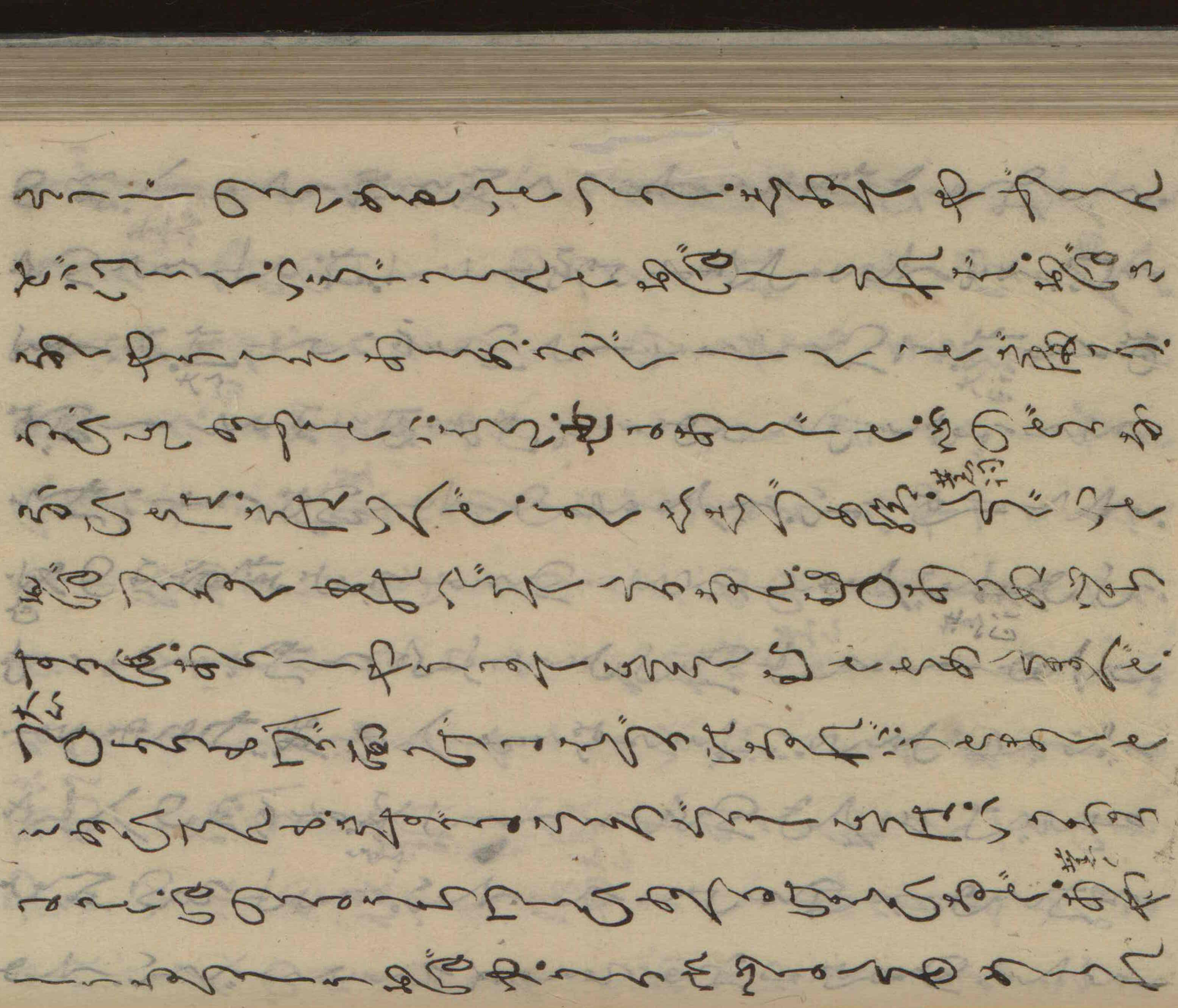
中ことはいでねどもれなげしこされけもひ
白心うざりなくおぼされ今り比つきく人のれころは
ふこめべくさぐひすくなげなり おさけのすが
さばこをくりて名おとまれられうつり香(が)なども
人されず物哀なりはざれこられころれけさぞもの
のあやめもこも分程まで人ごのぞきてこ居り中(芸)
納言殿はなつしくもづしげなりさ海越そひ
ゆくりけるおもひなしれ今ひとさはまや白これれ
さ海はいとことまなどめで男も白心こちすがらころ
ぐるしうつれ気色とおぼし出つ立もうへり
なまほしくさ海あしこさまでおぼさど世の男を

志のびてゝへ也給ほどに。えたゝやすくもまゐ
れさせ給ちず。此文はあらう日どとにあまるゝ人り
なさせ給。大ん どろかはあらぬまやと志るべし。おぼ
つゝるさ日かずれ川もる紙。いと心げくしにうじ
と志しもれを。身に夜さりて心ぐるしくもあり
れと。大 姫ぞ志はおぼしなげかれど。いとゞこれ志の
おもひ志げに給ちんにより。うれなくまてなして。
こげからざる。ち紙かうことおもひくへしと。
いよくかくおぼせ。中 黒ん 納言の志も。約ど紙にぞ
おぼすらんかしと。志やつまて。けがあやまちにいと
おしくて。白 文を写しおどろかしつゝそ。すゝ乱色を



こづしくもありぬべくな雨けづくりうせんど
ころだんれのどうな拙かくまれし給をげよ人(句)は
くはおもせざりやりとこあもせ給ま事がくしと
むしろ。家(句)を前につけてもいとことまりしづき
へなりて。これ芸(芸)はあるじがくるゝやすくまて
ちし給拙かく。まぶまらうとゐのかりそ給ちる
すまいぐしもちちまへれば。いとかくしとむ
ぬくり。うしろ給もさすがまいとおしくて拙づしは
射面(さいめん)し給。さしふれまくもあるれかくてのこ
やというじく根罪し給。やうく(大ん)ことりしり給ま
れど。人のゆうへまても拙をいうじくむしづこ

ゆて、いとゞかうかうをうきまれはおもひこそ
ゐ候ひたゝかるは、いかでくうちとけじおもれと
ゆふ人の御心も、必(ゆゑず)つしとさひぬべきわざる
しそあめれ、我も人もこゝおとさずは、うろうろがりで
やこましがれとせふこころづひかくしゆゑり。
句 文の御有様などもとひとこしたまへば、(慧詞)すめつ。
されバよと思ひしてのたまへだ、いとおしくて。
思ひしたる御さ海気色をこゝありくやうなどこゝり
事し給。例(大心)よりハ心うけりしうたひて、(大詞)稚かく抱
きひくたる程、すくし心ちもしづまりて笑むと
の給。人(慧心)はくてけど候くハまてたまれぬまれかし。



なりてつねよいかるべき身よりとなげきがち
まて例のと紙山鳥まて明ぬ宴(白ム)ハまぶ様○なる
らんともおぼさで中(詞)納言のあるじがたまふころ
のどかなるをしきことてうしやましそれとのゆへば
女(中ん)君あやしと字給ひりなくておそしましてハ程
なくかへり給があらずくるし。さま。こや(白)もまれを
いとじくおぼしたる。此心のうち紙にしり給ひ○ぞ。女
がたまは。又いかるらん。人へけんまやとおもひな
げきゆへバげ(地)ようろげくしまくるしげなる
ひぎかれとこも。京(白ノ)まもうくろへて。けうり給べき
ところも。さすがまなし。六条院まハ。左の御(タ)ほいとの。

くつくま信をひて、ざいりいかでかとおもしろ
六の巻のわれを弘、おぼしよるめよ、あな海うしめしと
ものへ結べかり。すぐしくしきれき海しく
ゆうしろくそしつまとくめてうちはうりまさうれ
へ実結べくあれど、ふるくおぼしるくて、いづし
すへ結らんもちくうかうかいとおぼりり。かべてま
おぼき人のさうしぶよつ人のすぢまて、中ころ
やすげなりざやうのちまくまはおぼされずまし
世中うつりて、こゝぢなさいの覚しとさつきまう
まもおもしろ海さば人よりうこさ海またそおさめ
あどらぶ今八何を数やるまうろまりうしさまへき

ゐどうぐ今はいと家やうまうろまうろまうへう

まうまもてなさん方なくくるしかりけり。中納言

三条の家つくりもてゝさうべきさ海まてつゝし

なんとおぼせげまゝ人はこゝろやすかりけり。

うくいと心ぐるしきれけしきながら。やすからず悲び

給うまゝうゝこゝまさひなやこ給べかめりこゝろ

ぐるしくて。悲びてうくうまひ給ましせ。中宮など

まもましこさうしめさせて。志だしのさいがれも

いとおしくとも。女がゝのれゝあはさがもあらじ。

いとうく夜をごまあるし給ちぬくるしげさま。

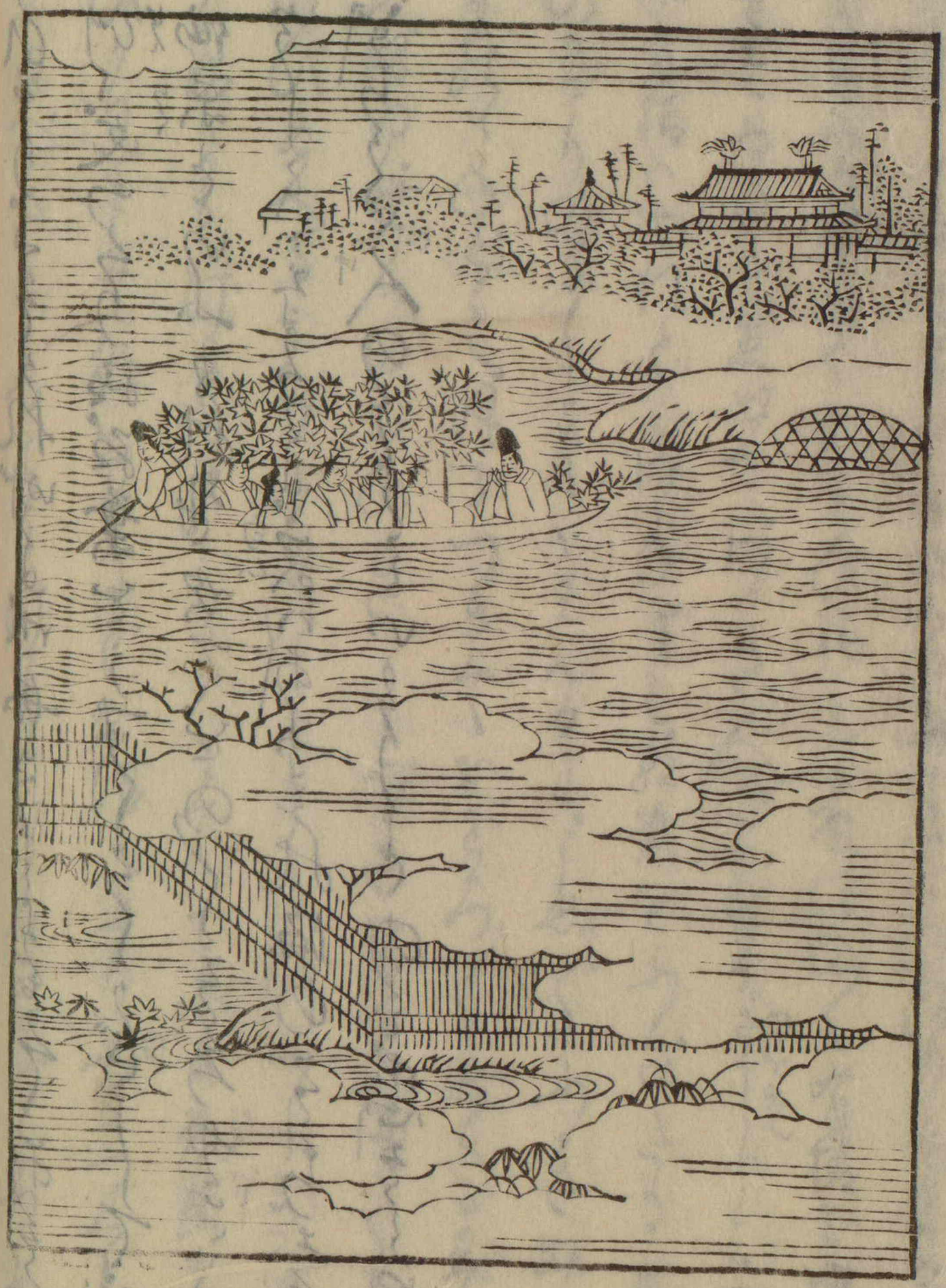
いこじくもてなしてあらせまてまつらがや

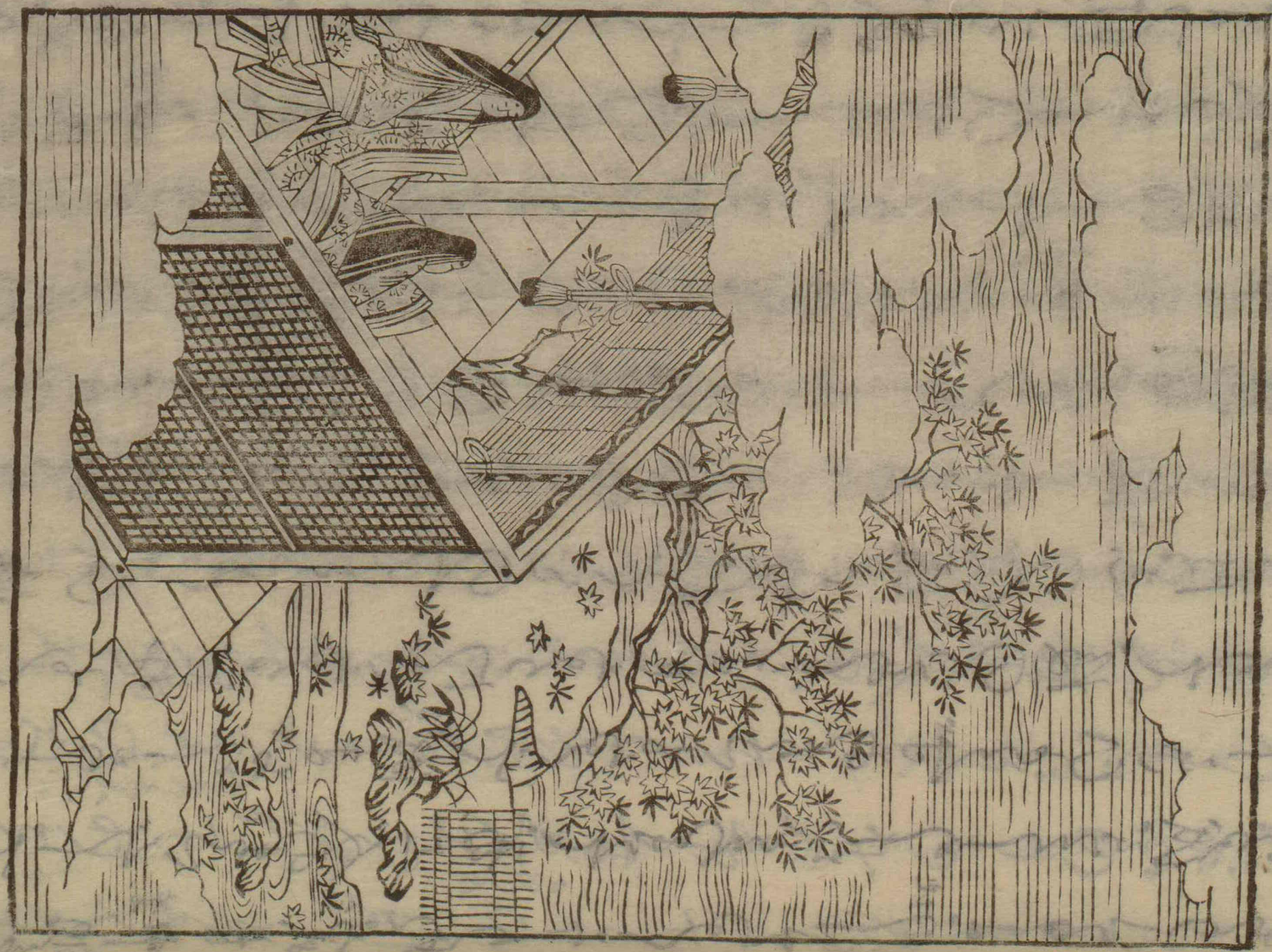
などさひて。何ながちまもうくろ人ず。十月一日之こゝろもがへ

なぞ。そうぐしくこれはあつかんなぞおぼ
して。此丁のうらびらうべきろなぞ。三条のうや
のくりまてくつらり給たんころまうけまきをうせ
ぬへるぬ。まづさるべきやうなんなぞいと思びて
きこしめて生れ給。さ面ぐなり女房のさうぞく。
此めれとなぞまものの給つゝ。ゆざともきせ給ひり。
十月一日ごろ。おじろもおかしきほどまゐんと。
（笠ん）
（旬を）そぐのしきこしめて。紅葉ゆしんずべくと給。
きろきき家べども。夜ごべのむつましくおぼす
うぎりいと思びてとおぼせど。亦をきれいさほひ
なれば。をのゆかしことひろごりて。左のおほいとのく。

宰相の中将まゐり給ひてハこれ中納言(蓋)成けるぞ。
(えんごろめ)上達部いづれもまゐり給ふ人ハお前ちかくて(宮)
(白ノ氏ハおと蓋ノつげ給也之)まゐらちかう中やさうし給ハんをさるべきさる殿ま
あはれなる紀の表も殊なる歌まうしにいたれ
うろさこまりなことくもとて、時節のあはれなる事より
あらたすやうまで給ひあはれ殿やうな実あて
(大)みすけうへのうしてうさらしひ、岩ぐされたり
つきれの紅葉のちり葉すらしもけ、やり水のみ
草なにとも色るぞてし給ひ(蓋ノ)おもしろく拙されな
どさるべき人々もあはれまいりだ(大臣)いゆうしげな
々れどいうかいきん、れいにさるべきさるこそつとむ

ひかりかゞやけば、舟さしよせて あそび
もの、文つくり詩歌をうすくろくぞうして、海
仙楽(せんらく)といふものを吹て、そのくろくゆきくろ
なりさかまよ、家(はく)はあふこれ海のうちそて、
まちあき人(じゆ)のうしろいふりとのゝ心えろや





(古代名)はまつけうろ(鮭)にいしして。うそふきずじあつり。
人のまよひすうしたげめて。おりをんと。中納言(葉)
もおぼして。さるべきやうにきこえ給ほどり。
内よりも中(明石ノ)宮のおほをごとにて。宰相(タノ子遠之)のあるの
清川(ウミ)鱈。ことくしきこ信が。ひきつれて。うつ
きさ海して。乗りこ海へり。ううやうのれあり
きは。志のび給とすれど。をのづくことひ給
ごりて。後のこめしにもあるけざあるをなもく
しきひとうずあまこもあるて。俄(ほハウ)におりしまし
ける紙。きこしめしおどろきて。毎ど人あまこぐして
乗りこるまつ(地)しこるくなりぬ。句も中納言(葉)

もくるしとおぼしてものくけうしもなくなり
ぬれ心のうちをばしらず思ひ（此候ノ云）こゞれてあそび
あるし川そふはうくてとおぼすよ文家（中家ノ事之）の大まさ
きらぬ殿ざべなどあまるなりのへり（白心）うろあ
こゝくしくて、くちなしくへり給ふんそら
なりしかし（中）こまはれ文とぞなれ給ふしやうる
こともなくいとまめぞちて、おぼしけることぐも
なさ海ぐとかさつぐけのへれど、人（中心）めしげく
さはがしかんよとて此邊なりしかすなりし思
有さ海まていめでこされあらりまじらも
むかひなきつぎれと、いとゞおぼしたり給ふ（比）よそ

なる紙。中納言（芸ム）の君も。なるくこれめ寄しける紙。
うれもしきつぎうれとおぼゆ。こぞの君はとも
なし君ごちは。菊の色をさひ出て。をくれてこゝに
なるがめ給へん。こゝろぼそさ紙いふ。（地）かう思びくり
うよひ給とほのさくこゝろもあるべし。こゝろ志ゐも
まじつまて。大かゝるまとやうくやと。人のはうへも。
かゝる山がゝれなれど。をのづゝこゝろ物なれば。
いとおかしげるこそ物し給なれ。さうの琴（こと）上（ぞ）
まて。こ文の明菫あそびなりし給なればなど。
くちぐまいふ。宰相（タノ子息）中将
（源宰相）いけ。そやも菊のさうりまひとめこし末の中

さんや秋はさびしさあるじまとせていへば中納言
菩 様こそおまひしらすれさきまほふ菩も知
葉もつゐなるゝぬよ伐 濤の雪 タノ一男
右濤の雪 いづこより秋はいりけん山里の紅葉のうげは
すきうきまれをゝ宮の大夫
中文大夫 こし人もなき山里の岩りさま心なぐも
ちへるくびれ中まおいしらひてけるさ給 地八分 こゝ
のつくおりしける世のとくなるぞ しひせちなり 白 宮
白 秋もそくさびしさ夜さる木の地を吹なるし
そこの松尾とていくしるぞくこしまへるを
ほのうましる人はげよかくなげすなりかりかふの

ほのるまゝ人はげるかくぬぼすなりかりふの

さよりをゐし給ひ心ぐるしさとこまる人あれど
とくまくりつゞきて。えなりしましよらず。ぼく
まける文どものおもしろき事ぐうちずじやまと
うさもことまつけてぬほかれど。もうぐまゝさこと
あらんやはうさしうきとぐめてぐる。こぐるしく
なんかしこまはすぐ給ぬかけもひを。とをう此まで
きゝぬ。さきのこゑぐさぐるらずぬぼし給。うろ
ようけまいる人ぐもいと口おしとまゝり。姫君し。
ましてなほをとるまゝく。風葉の文なるれうろ
なりかりほのるへのいふとなけばおとこといふ
もれはそうごと給ふそいとよくするれ。まゝぬ人を

かけいかれ中納言もいかるまちひ給へんこくりを
ことまとづしげるかひとはうちまじらるゞ。をの
とのさぶんが人ゆへは。おこがましきことをひ
こゞれ給ま。こちもさがひていとなやましう
おぼし給。さうしこは。こ夜さうる對面し給とき。
うぎりなくかうきことをこれめらぎりこまへれば。
さりともこゝよなういおぼしかりしじと。おぼ給か
なきもゆりなきさきとりこそいかし給らめと。心の
うちはおもひなぐさめ給へるあり。ほどへはけるが
ちひいまこれ給ものしもあるに。中こまてうち
きのひぬるは。つこうも口おしうもおもほゆるま

いとゞ抱あたれなり。悪び（中ノ大ム）がうきれ氣色なる後。人
なこくまもてなして。例の人めきたりすまゐ
なるがうやうまもてなし給ましき後など。ある
君はいとゞしくあたれとこなり給。われも世なり
なげんばうやうなることこゝ何べきまこそあ
めれ。中（菅）納言のどき後うしざ後まいひありき給も。
人の心をこんとなりそり。心ひとゝまもてこなれて
おもふとも。うしらんやなかざりこそあれ。ある（内ノ女ともこ）人
のうりず後まかりすぢのとをのこいでとしひ
とめれば。こゝろよりほかまつゐまもてなされぬ
ごかめり。これこそいかんすくさかこちして世を

どかりこれこそいうへすくさうろうしてせを
すぐきとのゆひをきしいかうことゆやあしんの
いさめ如かり。さもこそいうさ男どもにてさるべき
人ぐにもとくれなしめやうのゆれと人ゆへなる
ことをそふる有さ海にてぢきれかげをさへなや
ましなんがいうじさぢ紙ゆれざるさう抱むひに
むげまずつこなどいとゆくらぬさうさりいかで
なくなりなんとおぼしむづむにそうちも海とる
くるしかれば抱も露ばかりあらずさてなりしん
後のあしましごと紙明雪むひつげ給に抱ころ
ばそくてこれ中恵をこまり給もいところぐるしう
我にさへをくれなていかるいうじうなぐさむかる

なりしんおたしくおかしきさ夜を明くれのこ抽
まていかで人ごとうもこなしましんとおもひ
あつふとそ人もれぬゆくされのこのこまも
もひつれかざりなきく人まれし給ともかざり
人口人なるめ夜そん人の世中に立まじ事
例の人ざ夜まてへ給りんもこぐひすくなくこゝろ
うかんなどおぼしつゞくるまいふかひもなく此
世に住いさくかもひなくさむかるなくて過ぬべき
身どもなりと心ぼそく覚れ句ん こやいこちかへり
例のやうに思びてとゞいでこち給けるを左衛門詞うぢに
うかれ思びごとにより山ざとのれありしきも

ゆくりなくおぼしたりなりかぐしたきれ
有さ由と世人もしたるそしまたなりと清(リノ一男)替の
もしし戸給ひれば中(ハ名ノ)家もしたるしめしなげき
(今上)うへもいとゞゆかさぬれそしまて大方ころに
まゝせぬへるれ里ずこのあしきぬかりとこびしたき
ことゞもいでまて(内裏)うちよつとさふらいをなり給
(クノ)左の大臣(おほいとの)殿の六の君をうけひかずおぼしたること
なれど、そしたちてしまゝせ給べくこれさゞめしう
(葉ム)中納言殿にしてぬて、おいなく袖をおもひありき給
ワがあまりことやうなるぞや、さるべき契や有けん、
(ハ)みこのうしろめたしとおぼしたりし夜も哀に

わかれがつく〳〵これ悲ぜ迷の中有様けふひもごくあう
こゞるくてぶうるおぬろ人語えこの。おゝしくも
おばゆりあまりまゞ人ぞしうまてちすさがやとおや
ちぶこまでまてあつりくろうま。家もおやすくまと
アしまちてをあ語志りが我が身ふりうこいとくあうりまゆ
づうく宵さ夜もあいるくてりくまて有すてしと
ちへぶらやちくも有けり。礼いづれもワがまれあて
ミまんまよずもんべき人まあうし。ぞり内寸
桐ゑうしのぞあいがまうう心ひとつまちひこぶれ
語家いまうて此心よりくらめありすく。これひしー
うえるめくしとあばまれ流りつまつきて芸すく

白
白ん
岩中芸行

廿六十二

おもへば義はさりてれいぎはのぢやりはなく
なしのへずぢしまはもひ出しさまへるまいらたび
ふみやうは人のさいしゆべりめるもうしなんうら
わしきしお帰さやも帰られ出給ふ時分いうくし
てのどやりたる日安一家のれりたるよまりあへれば
お前よ人お帰くもさわしらずまかやくまれ給ふど
れんずる行ちうれ千ぢうへぞくれまれ給
出まし給ふさうまあくあてまそうさまれうきおるよ
びりよおりしされけらひな年代わさうちうさ拍う
なひ出てなて父これは有さ度よなずよ人世よ
はりちんや、吟泉院の姫ぎんくりしそれお帰しの程

うちくのれけらひもうろよくさしぬれどうち
いぞんうもうくおぼしけうるよかれ山ざと人(けん)と
らうらげよおてなるうるのをさりゆ者まじきぞ
りしなど先さひ出るよ。いとゞ遠しさまきろなぐさめ
よれ急どものあまたちりうる紙こうまへばおりしげ
なり女急どものこひすり男(おとこ)のすまねなどうきまぜ。
山里のおりしき家ねなどうろゞしよれ有様
うきうる紙よそへらるゝ御ぬくれめとまり
ぬへばすそし罪もまてかしこへそまいんと
おぼしざいどう物語りさそいまうとよさんをしへ
うる家の人のむすんといひうりをうて。いうに

おぼすらんぞこしちりく来りよりゆて白詞いよしへの人も
さるべきほどいへばそなくこそなりしてゆかれ
いとうとくしたうのこゝもてなさせ給こそと思て
ゆくゆくいへ女一宮ちゐ急まりとおぼすまし白うまゐ
よきてお前まさしいれゆへる御女一ぶしてゆゑん
ずうれぐしのうちちなびきてこぼれ出たるかこそ
ぞぞかり白ふのまゝそまつり給がわりずめで
たくすうしもくのへざそたう人とおひ罪まし
かぞとおぼすまし志のびがたくて
白 若草のねえんもれとはしるもぞむすぼれ
たる心らしそすれ女一おまへなりつる人ぞハこれ白文をば

ことはたちぐまして、まれくうしろまうれたりこと
しもこそあれうしそあやしとおぼきばまれもの
給ちずこと（自ム）ちりまそうしちくまれせといひたる姫
君もざれてまくおぼさう菓の上のさりあて（まき）ぬ
ゆゑ所紙がちまらりしきそし給しかばあまるこの此
中ま備（つぞ）なくおもひかりしきそしおつり世まなく
りしづきまくおひてさふふ人ごもりたれま
すくしかりぬ所あうりはしたるげなりやんごと
なき人の此姫（こむすめ）などもいとおぼかり此心のうつろひ
やすきはめづらしき人ごまどろくしたひつる
などしき給つるかけけたりをおぼしきりなる

物のしなどもいづれ勝るとて見えぬめ(宮法)給ふ見えてともいはぬ
こしまだらかなる心ちして給ふらむありと心ばへそう
なかめ給ふ(薫宰相へ)中納言なりしこゝろ(大ノ)なりせばまし
かゝしてれまかしひなうかうと心ちまじる
(まり)汁の物なやこゝよもあるゝどもとつけて対面給ふ
ものず(薫詞)おもいろうきなかしくちうけきはじとありきつね
かく紙くれなやに給ふんれおもらちうくとせちうに
あはつらなかりこゝてめくげ(大ノ)にちうらけてすまひ
のへるうくの、こゝすれまへにいれ(薫と)ずあう(大ル)らくく
つきさげなくなうしかりめくでけまくくいおしてで
れごしまらげれのへちなど見て給ふ(白薫詞)こゝやのれころも

ゆりでおりし色にし宵程あまどくらり笑九あてのど
りまあ御を、こころいられ志て女恨(うらみ)きてて給そちなど
をしへ笑くあへいこ(大同)くまはともくもきてし給を
ざめりちまさ八人のれいさあいりくりことまこそとこ
給りぞりりるん、いとおしりけりとてあまき給氣色
ちりいと(慧心)心ぐるしうまれさへまづりしき心ちして
世中(同)いとてもうくてもひとろさ夜まてすぐすこと
りくくちるん給りせいりちりこと紙もれんじ志ら
ぬれこころどもまはひとへまうらめしちまど
あ御すこともあらんとしあるてあ御しのどめよ。
うしろめたういよまあらじとちるんゆまひ行ちど

うしろめたうはよまあしじとなんゆまひ仍ちど

人のれう人をさへあけなふもかけきあやしく
あげゆ大よかくいましていとくるしげる志給されば
うとき人のれけたひのちかきも中の君のくるし
げるあげしされば御御のあるさまと人ぐ御方
れどまして蓋詞くわづらひ給ほどれあげつるちさ紙
おひのまくる氣りきそいぐしたちうまへれば
いとわりなくなん。かかりのれあつかひもふれ
かはたかぐしくつうまつるなど。弁のおもとる
かたらひなて三寸法どもりじむべきとなどの給
いとこぐるしうどくさらのもいとりしき男をとき
きなへど。おひぐ夜なくの給りんもうそくあれば。さす

がまはずんばよく あひの人家心だ人も義あらう。又の
あしさま。すこしもよろしく智さるや。生目だらう
まそずまちうし さいんとあれば日比あれはまや
なかいひとくましうあるんさうばらまとひひ
出しめくりひとく義よいうる地しのへばなりぬ
あんばりしまりはろくしさ此気色あるを
胸つぶれて見ゆれば ちつりまりてよろめのとくせ
男泣くなしうてえ男ずずうしあらぬん程よ
そひくなすうさ義あるけうひをかざりあすう心
がなしうてあげさねおくりさずまつれぐと
くてかりしぐるなれがひとうきろめくるなれど

くり給ひ（泪）られすゑおはしませばくるしからずと
よろづ給はしとうぞてさるべき事なりけれ
りしなんぢがよでよきて御囲（あざり）乗まきれ給ま
心まつるべくの給ひてまで出ぬめしよ（荳）の此とをなす
人のはりしこしうてなつかさ人とつくしひかり
ころありけれどもかずての地（荳荏泪）よりみ家（白）の此悪び
ありき制（せい）をうけれおそぶちよのきこゆりおつしま
すこし左（夕）の大臣家の姫君とをなんいともおもはれたまふ
べかりけるはおすいはねばのれはいなれば思ほしとぞ
さはりくるしくてぞよのうちにありめべかりける
家（白）いとふかくよおぼえてぶち（内裏）つけりけるよしぞすゝむ

がましこゝとは此心をいれて、みかど（今上）きさい（明石中宮）志
此いまさめるさしげまり給べくもあらざめり。げが（芸）敷
とそなる後あやさう人は此給ひず。おまりまめる
おりしまして、人はもてなやまれぬへぞよかく
けたり給のこなん。めもあやにおぼろけなるぬこと
と、人のなどこゝろけるなどぞこそいひつれなど。人ぞ
の中にてこゝろを（大ノ）罕給にも（大ん）いとゞむ。ふるがりて、今
ハかざりにこそあるれやむごとなきこゝにさぶまり
給へぬ程のなる後ざりのれすさひにくまでおぼ
しけんをさすがに中（芸）納言などのおもとん不後
おぼさて、云のこのうぶりふるさなりやりとせひ

いづくまもおもすしんかるまむ人なてよかう
いらじく抱きふ身どもとうち挙(すて)なて、夏まぐまこ
え給ふめよときひつぐけのふ、(比)少菅の毛の氣色いと
すぐく時雨て、木のえる吹ちしふ風の音などこと
へんかるなく、ふしうるしさきはもひつぐられて、
そひかしぬへるさ雨、あてる限なくえし給、ちろき
れぞまかうこいけづるともも給ちで、ほどへぬれど、
雨よふすぢなくうちやられて、日比ますうしなを
えぬへるしもち雨めしさ雨さりて、ながめいぐし
ぬへる、まこひさいつきのほども、こうしらん人ま
えせまほしひ、ひかひの(中)君風のいとあしきまおどろ

うきれて、おきあがりぬへり。やまぶきうす色ちど。
黄やかなりいろあひ。まれかほそこそうまそ色
まほりしたんやうまいとおしうくれぐとし
て、いさゝか抱きつべきき風も志すへらず。中詞八こゝろ文志
長まこしぬへる。いと抱おぼしたるそしきまて。此
はうまこそほのめきぬへれとうたりうまへれば。
大心いとゞ志くかなしさそひて。詞うせぬて後いかで長
まもこゝなしんとおもふ。後ざしまこそこゝなしきとて。
ふる所ながらいとゞうちまき給。大心此明嘗志ひ出
なれば。ほのめきもやおとすしんいかでおりすしん
所は君家しんつゝふかげなる男どもまてと。のちの

せをさへ志ひやつと給ふ人の（今）ゑまはりけん番（うう）の煙（ほかり）ぞ。
いとえまほ志くおぼさるゝ。（地）いとくらうなる程に。
（白）えやより此使ありおりいすゝし地志ひなぐさゝぬ
べし。此（中）ゑいとゝまもゝ給ちずなる（大詞）成心うのくく
おひゝうなるさ後に罪しぬへがうでとうなるも此
給りなぐこれより名おなるさ可にまてなし罪ゆる
人もや出こんとうしろめたき後まれまも此（白）人の
志ひ出さゝし給へんにさやうなるあるまじき心
つゝ人いえあらじと志へばつゝきながらなん
これまれ給ると罪しぬへば（中詞）をくらさんとおぼし
けるそいとゞう給れといよくほとひきいれ

絡（大付）がざりあれば片（ゟ）時もとまらじとおもひしかど
なぐらふるつぎ皮そりとせひ行るぞやおすさしめ
よれさすがまなげしきも御（た）がこめおしき命は
かはとて御はとなぶらまつらせてこ絡れいのこ皮
やかまうさめて

（句）なぶむれば出なぐ雲ねといかれぞおぼほう
なさ後そふる時毎ぞうく（地）袖ひりうなどいふこと
もやありそんこ（大山）くなれまうとなぼおしじことくこ
なまつけてもうしめしさ皮さり絡ざぐらり世は
ありぐさ此有様かうちぼいとじいでん人まめで
られんとこれましくえんまてなしおへれば

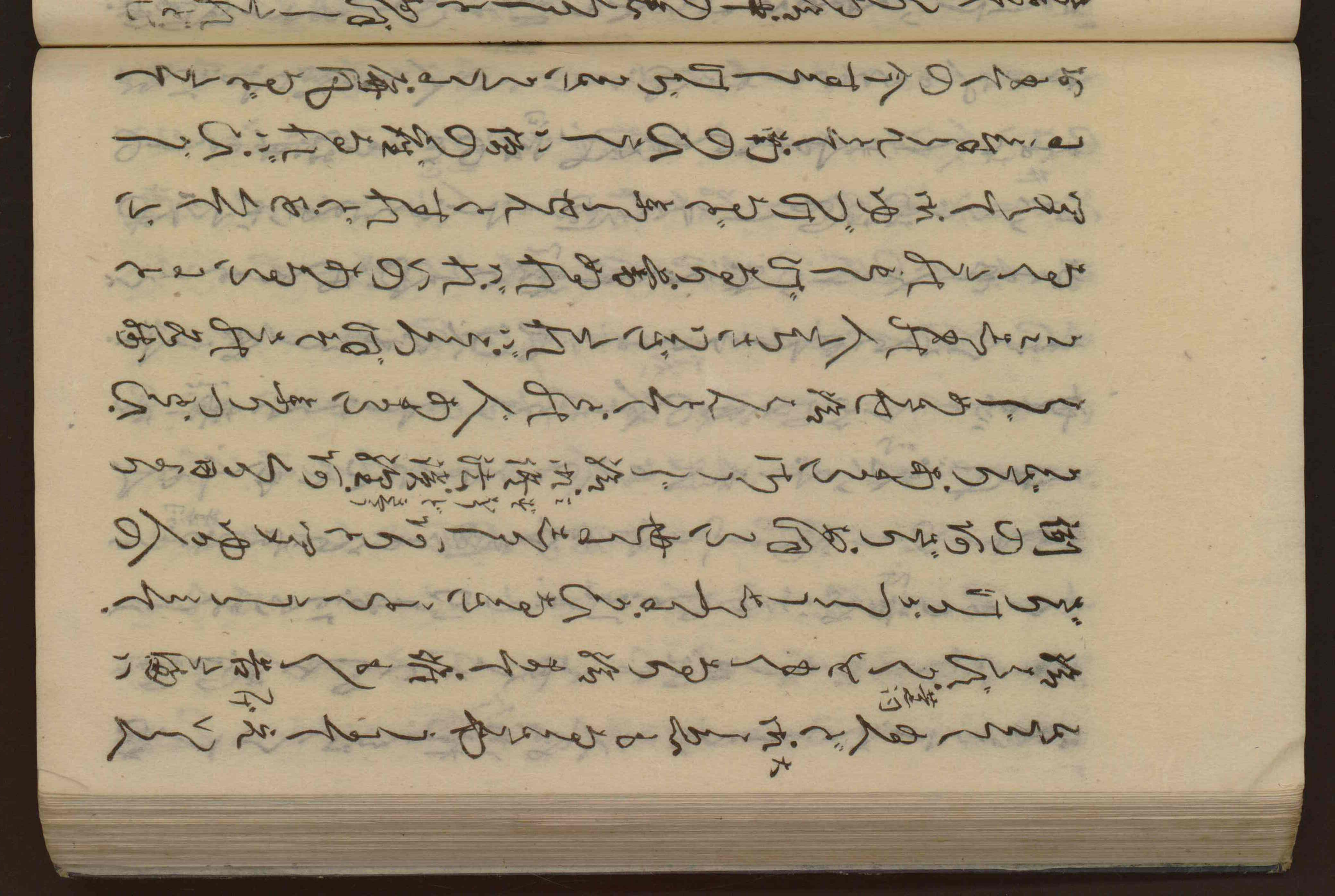
ひさき人のころもよせまり給ふんもことわりなり。往(中ふ)
ゆるゆるつけてもとひしう。さぞかり所をきまで契
を給給しをさりともいとくてはやまじとおもひ
なをも心ぞつゐるそひけり。此邊と東にありなんと
ことゐれば。これかれそぞのしきゐれば。こゝ
ひとことなん

中 あれゆる深山の里は朝夕まちがしかも
うきくしつゝ。地 うくいふも神無月のけごもり
なりけり。旬ふ 月もへぐりぬるよと。白 夜はしげ心をすく
おぼされてど東くとおぼしつゝ。さまりおぼ
なるほどる。五節(せち)などくいでさるる年まして

たちけるいまめかしくまかされがちまそ。ひざと
もちそれどすぐい給行まおさ御しう約ど紙なり。
たるく人（中）とも給まつけてもさらハれたるなり
たるなりなし。左の大臣（タ）殿のけらのこと。大（四石中文同）
家も稱さうのどやかるれうしろ三紙まうけ給
てその間れ勢まれしうぬばさうく人あらバ来る
まて。とも〻しくまてなしぬへと思へぬへど。
（白詞）しぐしさしふまつやうなど思へいなびぬて。
まことまつきめはいかでかうきんなど。おぼすれ
心をしり給ふるハ月（宇治姫遊ム）日まそへて抱とのこおぼす。
中（慧ム）納言もうし行ようハかるびさうれ（白ノ）心かれさうとも

とさひ罪しけるもいとおしく心ゝ思ひしけく。
おさくまいり給ふず。山ざとまほいかなくとと
ふしひ罪し給。この月となりてハすそしよろしう
おもすと罪給けるに。おほやけけてそし。まれこハ
ぐしきころまで。五六日人もそまつり給ひぬに。
いかゝしんとうちおどろかれて。けりなきことの
しげさ紙うちすてく（宇治へ）まうで給。ぜ法ハをこうりて
給までとの給ひ乗けるに。よろしく成るけるとて。
けぎりをも也し給ふれハいと人ずくなるまて。例
のおい（弁）人いでゝまて。此有信罪也。そこ（弁詞）ハいとさ
ところまるくおどろくしかしぬれるやうに。他を

なん文をきこしめさめ、もとより人をく給ひず、行ん
うまなりしますうちに、これ文(白)のれこと業にしの
ちいとゞ地あげしこうさ庵にて、ぐらるきれくぐ地
ざるぬしんじいれざりし後(アミ)りにや、おきましく
よくくなりのて、さらにこれひべくもこし給ひず、
世る心うく給けるの命なきにてかゝる事(こと)を
こまれば、先(まづ)いかでされざらきこしなんとしふ女人
いりて給と、いひもやらずなくさ庵にとりなりなとう(芝岡)
うくとも苦(つげ)給はざりけるに、院にも内にも、何きましう
事しげきにて、日比もえ寛ざりけるあげは、
なきとて、かりしるに入給、れ(大ノ)枕がきちらくて物



さきていろは経中の恋くらしとおぼしされども
れなる経お経まてこれ経のあまりなるとこれ
ひてうらくもまでなしへぞなずぞやよ
もじめて法花経を不断よまをきさ
ぐせうず十二人ありていとうさし。次はうろうの南の
まるさもありてうちはくしたる。本尊をひきあげて。
すこしすべりへてそこそまうりのまへばおいは人どもも
二三人ぞまうでふ。中の君はやまくれ給ぬれども
とんずくるるは心ばそくそめしまへる法をまふしう
流て念ずまこうせ給らめとそ流るをとらへて
おどろうしまえしのへは心ちまたえしなずし。また

いふがいとくるしくてなん。日ばかりづれ給はしざる
つれば。あばつるくて色ばりぬべきまやと。くち
おしうそ侍つれと。いきのしるしのぬふ。筵詞
まされまりつる程まで。無りこざりけることして。
さくりもよくとなきぬふ。大ノ代ぐしなどすくしあけ
くぞおりしけるまのつゝなりれそちよかへの
なげきおふそうくいあんなれとれそこまさし
あてく地をあばくしそくしぬへば。大ん うさうもちば
かしうもあばしてかかをしてざこまへり。いとゞ
なまくとあしかまそかしぬへる代。筵ん 宛しうえ
なしていかるそちをんと。胸右もひしまてあばゆ。

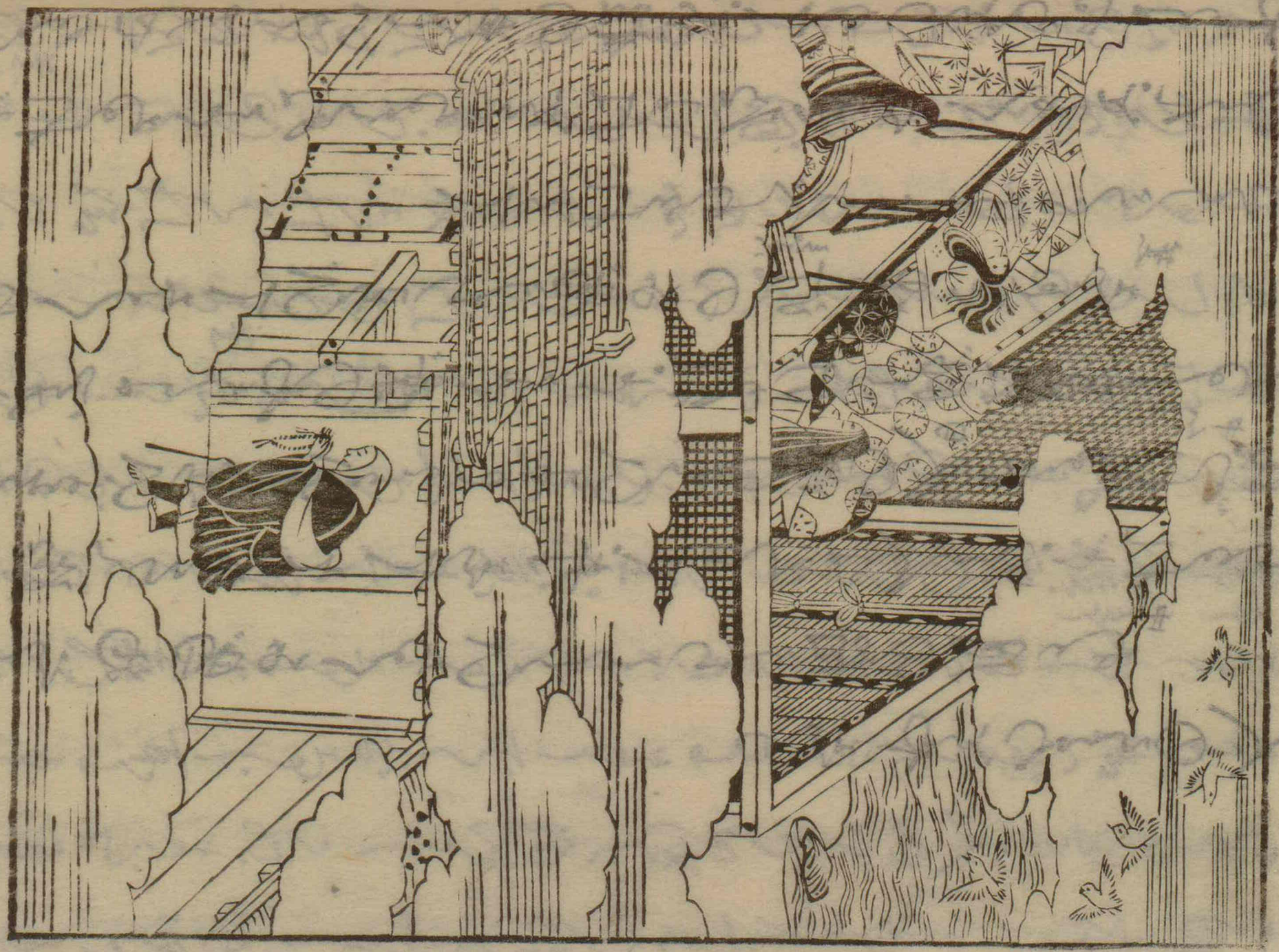
日(詩)ばこなりぬへらん此心もやすらぎ(中ツ)ぬ(ぎ)さい
つんと夜ごまころやすくうちやすきせぬへ
とれぬべきふしべしと笑しぬへ(中ん)ばうしろめる
それどさるやうとそはとぬしてすうしぞき
ぬりぴ(芋)しおまてまはあしるどうひよりけくそ
なりぬへ(大ん)ばいとくるしくもづしそれどうくる
べき歟こそはありけめとぬしてこまなうのど
やうまうしろやすきれ心とかれるつるの人(句)は
こくらべなりぬへばおもれともしひしられまうり
せるしく此なん後のしひ出ともこころごちくしひ
ぐ夜ぬしじとつくそぬてけしるくもえとし

こゝろ給ふず。東(菫)もすぐる人をそゝのして代ゆ
るどゝあらせまりぬ人ど。落(大)ぐらり年ゝ氣色も和
しいえじ(菫ム)のワぎやいかうして。かハかけとくむべきと。
いたんかゝるくさひねぬへり。不断(ふだん)程(ぎやう)のあり月が
これ。おかくりこゝろ急のいとこゝしとさまゝ。かぎり
もよねまさつひてねかりこゝろ。折おどろきてぶら
まもむ。おいかれまこれどいとくろづきてこれゆし
うゆる。いかぐ(あぎり詞)と東もおりしまし。つんなどきこ
ゆつゝでま。右(八)家のれことなどゆのしまてこれ。まだ
まだうらゝて。いかるゝさゝろまおりしますらん。
さりとも。隣しきるまぞとさひやつとすつとゝいろ

ころの夢になんしおりしまゝそくのれうこち
まて世中をゆういとひたるれしかば、こころと
まうことなりしと、いさゝか打たひしことより
こゝれてなん、こゝ志がしねがひのところとへざて
らわるとあまふなんいとくやもしき、すくむなわざ
をまといとさゝかなあほをられしと、こちまちる
つうまつるべきことの覚し給ねば、こへこゝかり
たゞがひて、をこなひし給ひ法しがらぬ六人志て
なまがしの念佛（りんぎつ）なんつうまつらせたべる、さてハ
たひぬへえたうこと給て、常不輕（おやうふこきやう）となんつゞせ給ひ
などしする、恵（芸）もいこじうなき給、（大心）れ世りしさへ

さ海とげさきゆらん。つゝの程をくるしき心ちにも。
いとゞこそし入ぬがりあげし給。いりでゝれまゐさゞ
より給いざらんさきまゐまうでゝ。おなじ取るゆと
こそかしぬくり。おぎりいとゞずくなまて立ぬ。これ
常不恒（ぢうふきやう）。そのほうりの星ぐ。家までゆりきけるが。
暁（あかつき）の風ははびて。おぎりのさゝふあらりをさゞまて。
中門のもとまゐていとこうとくけく。恋かうのす
恋つるのころゞへいとあられなり。まゐ（蓋）ゝうとも
しるゝはすゝこころ此心まて。衰志れだれ給ひず。
中の君をちはあげつるまて。おくのゝるなる
末松のうしろはよりぬくるけしひと望ぬひて。おぎ（蓋ノ）

やりはねちをりゆて。不(行)狂の声をいかぐ学せのすひ
つゝん。をもくしきたはをこちもぬことなれど。
こうこくとてもしべわかれとて
(葉)しもさゆる汀(ぎざハ)の子鳥うちはびてをくれ
るすしき軸ばらけかれ。とこと葉のやうに学し
給。(中心)づれちまき人(白)のれけるひまもかなひて。しひよそへ
らるれど。いくへまくて。弁してぞさそ給
(中)あり月の霜うちもしひるく子鳥物しふ
人のうろをやしる



まづうしぐらぬれかたりなれどゆへなりしぞ
きそくなれ。うやうのもうなしごとも。ひくまし
げなりもれとらちなりしうひあるさ海にさり
なし給もれをいまはとて別なばいかなりしろ
きんと思ひまどひ給。宴の夏にこし給けんさ海
おぼしあもしすなまうう心ぐるしきれ有信どもを。
あまかけるとてもいかにこ給らんと。としたられて
おりしましくれてらにもれ涌涅ときせ給。取ぐに
れいのりのつひ出しとてさせ給。おほやけにも
ひとうしにもれいと海のうしゆめて。まうりいらへ。
よろげにいらしぬとなくしおのへど。もれくつま

めきこゝろれやまひまもあらざりければ、なまのしろ
しもこゝぞ。こゝ(地大ノ事)ぞ、しもこゝろまあらんとほとけ
とも念じ給ひしそあらあ、なほ(大ム)かゝつゝてま
いりでうせなん。これ君(其)のうくそひおそ。おなくなり
ぬるほ、いまはまてまゐれむるなし。さりとてかう
とろうなしぞこゝもめつゝろだへのことさりして
けれも人もこゝんが心やすからぞうかゝべきこと。
申し命をおそてしまゐらばやまひまことつけてかゝ
ちほもかへてん。さてのこゝそながき心ともかゝこゝ
こゝろのべきけぎなれとせひしこゝおそとおろまて
もかゝるまてもいりでこれ出家ノ事せしことしてんと見す候。

さるでさりそくいえうち出給ふで行のみや
大将ちうのいまくされまいげるくおぼゆるにいま
とうんいとちうしまて、命のふかきを申しけれ
さやうはおぼりまのこすまへと申しあへじ。それ
あきさはぞて、いとおかましきれ事なりうく
ばら斗おぼしまどふめり中納言殿もいかがおへなき
やうるらひ申し給ひんとよげなきとるらひて、
されまへあざりまもりつゞけばらちおりおぼす。若く
こまりぬおんへればそくいざつれとふひまかり
たく物志給人もありざうるはおぼされぬとくそ
なれば、されぬべきてしきけいしあぐいきめく

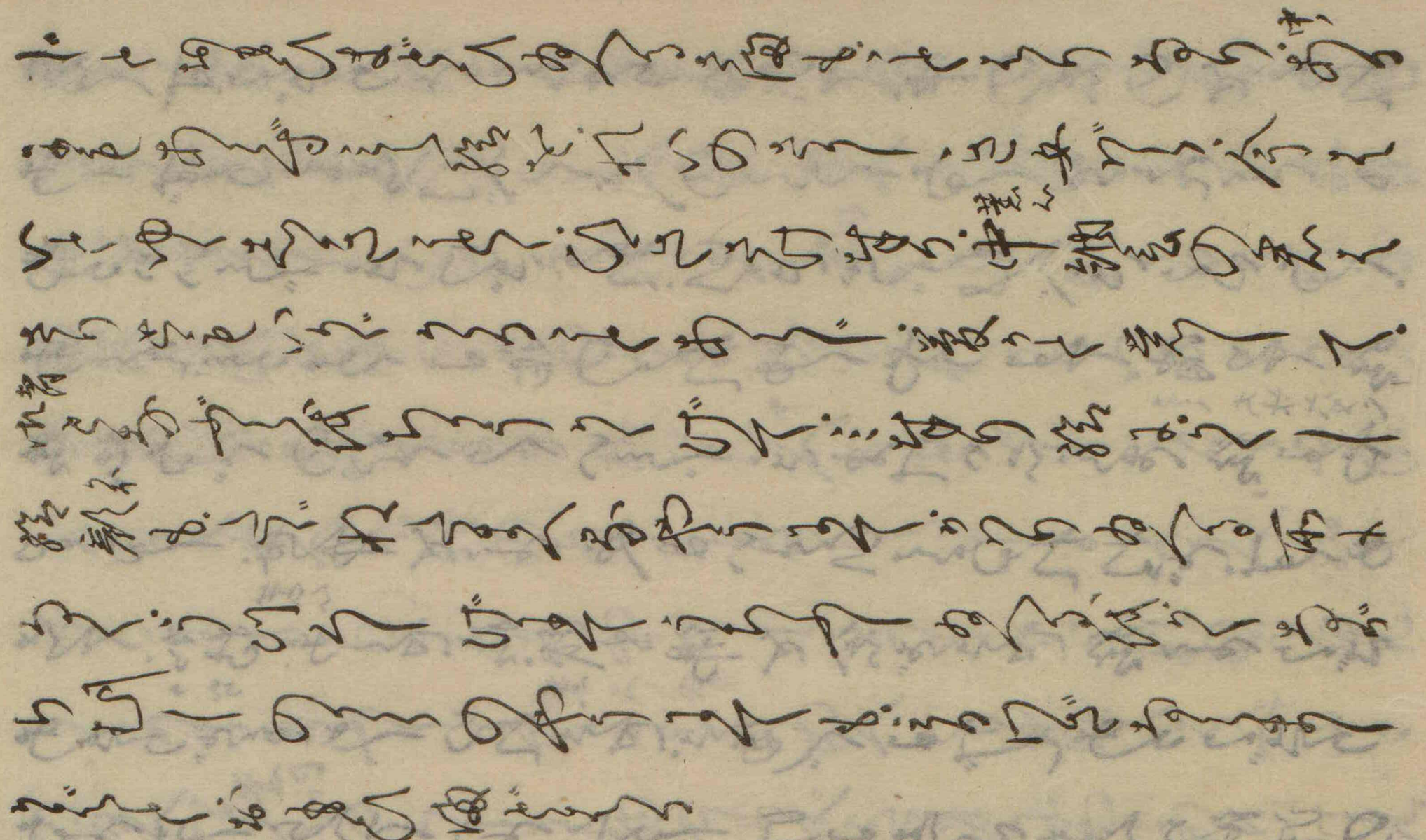
よろげのれいのり紙をさせ歎(なげき)事也。(兼)とよれあるりい
そふぞうしと。京おもひやりと給。風いたう吹て。雲の
ふるさ海あれたくしうあれまどふこやこまはいと
うしもあらじうしと。人やりとなるぞ心ぼそう
て。うとくてやこゝめべきまやとせふ契はつらそれど。
うしもむべうもあらぞなるしうらうたげなる御
もてなしをたゞしぞしまでしましても。例のさ海まなし
てせひつゝとぞうたゝとゞやとせひけゞけて
なぶめぬふひりもなくてくれもてぬ
(兼)うさくもり日かげもえぬおもしまに心をくらす
此まもあるに。たゞくておもすりをたれこまこれ

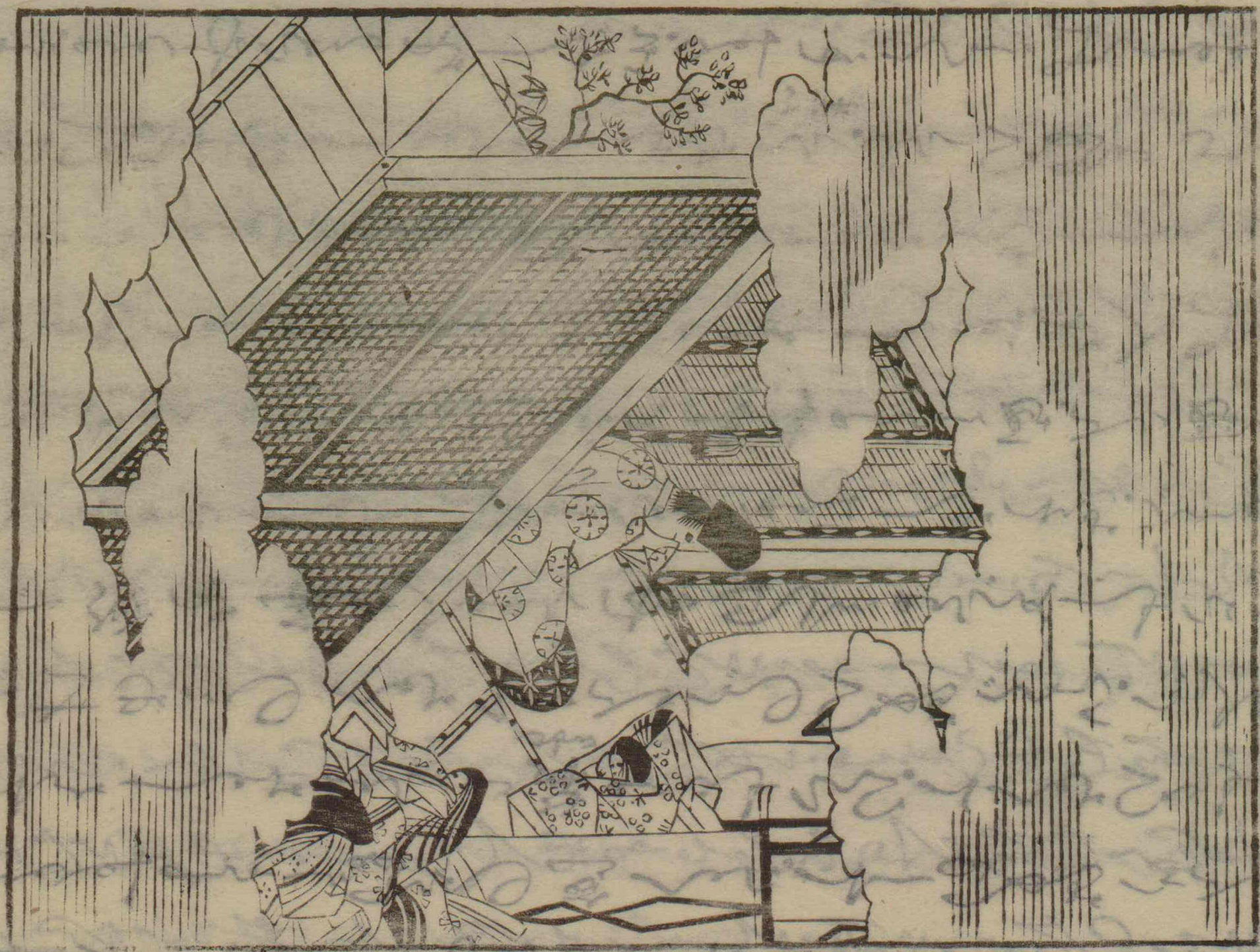
おひさしかり。御のちかき方におもへるささこ奉す
あだごと葉のあらはにかきとめなば。中の思ひかくに
いり給。こゞしげかる人ども。うくやさうれぬる
行に。つまちうかりて。いうにおぼさるゝうちり
おひ給すにあて。会しかゆうひあくれ声を
ざるにさず奴にされば。いとこそ縄しされ。どう
うし給ごく。いたどうつくしみんと。あくくこそ
給ふれ大。苦しずなりにたる藤なれど。脅ともいと
よくうしのへり。ゆかしき際あるが。身まはさるさ
ましまゆれど。こさしへやうまのちかりゆくは。
ちかおしきれざるこそといふ哀と おひさまへか

気色なるまゝ、いよ／＼きこしめしてゆるさ
かくろばそげなるおもふさはしじと川くさ給
へだてなくもおしまれず、いかなる楚まてかぎりなく
せひとゞてなづかう、つくさこそおほせそ別当なるべき
まかずらしうきさ夜をとぶるさせ給ちかふらん、おもひ
さ夜すがらまもきんともまされど、いよ／＼哀げなる
わすらしくおりしきれおりさ夜のこみゆかいな
なども、いとほそうぬて、げのやうまはげなる
抱くこ文おもひうかずもちうまいらしげなる
なまとてもうきれぞどものちまびりみするまゝ
うすまさうしやうきて、なるまあるもなきひぬなれ

給ちんれこと候なん如まひ罪ゆりと。いらへをさせ
生らんとて。かれ此とをかけ女へだ。大ほかくし給れ
袖をすうしひきる候して。詞くちれかるけ分
抽候。ちひぐ夜なさやうまぬぼされうつるもかひ
なかれば。これとまり給いん人中をおなじことくちひ
きそしまへと。ほのめしきそししま。こぐへ給え
ざらましかばうしろやすうましと。これのこなん
うらめしきつしまて。大人会がどまりぬべくぬぼしそべると
のまへば。蓋詞かくいうじう抽ちつべきまやありけん。
いかまもくことぐ夜まこの世をちひかうごふかる
のゆらざりつれば。れおまむけりしこがへ
きそしずちりまし。今なんらやもう心ぐりしうも

きそしずちりまし今るんらやもう心ぐりしうも
あげゆかされどもうきろめたくなせひきて給そ
などうしらへて（たり）いとくらしげにしるまへが（ぜかう）終法の
あぎりどもめしいれさせ、ぎ面ぐにげんあるうざり
きて、かぢ（かぢ）持来らせ給、我（蓋）も佛を念ぎさせ給ことうざ
まなし世中（蓋ん）せこと定にいとひもなれねど、すくめ
給仏などのいとうくいうじきまれいたちを給まや
あらんうまくは地のうれゆくやうまて、消（さし）て給（大米六文）
めるいいうじきつぎうれひきさうじしべきうるなく、
あしずりもしのべく人のうくるしとうんとも
若しずうぎりとうまりなひて、中の君のをくれ





いまもれことをもすゝれぐしをかきやうまさと
うちまほひたゝ。たゞ（葉山）ありしなぐらのまほひり。
なつしうかうぢしさきもはりぐらう。なまごとまて
これ人をすてしもなれめなりしとおもひ
さ海さん。海ことを世中をしひすてもいるしうべ
なしがおそろしげまうきことれかなしさもさめぬ
べきかしをぐるまうけさせたまへと。佛を念じ
ぬへどいとゞおもひのどめんなくのこあれど。
いふかひなくてひさかなる煙（ふり）まごまなしもて
てんとおもほして。らく例のさほうどもするぞ
あきましりけり。宅をあゆむやうまたゞよひけり。

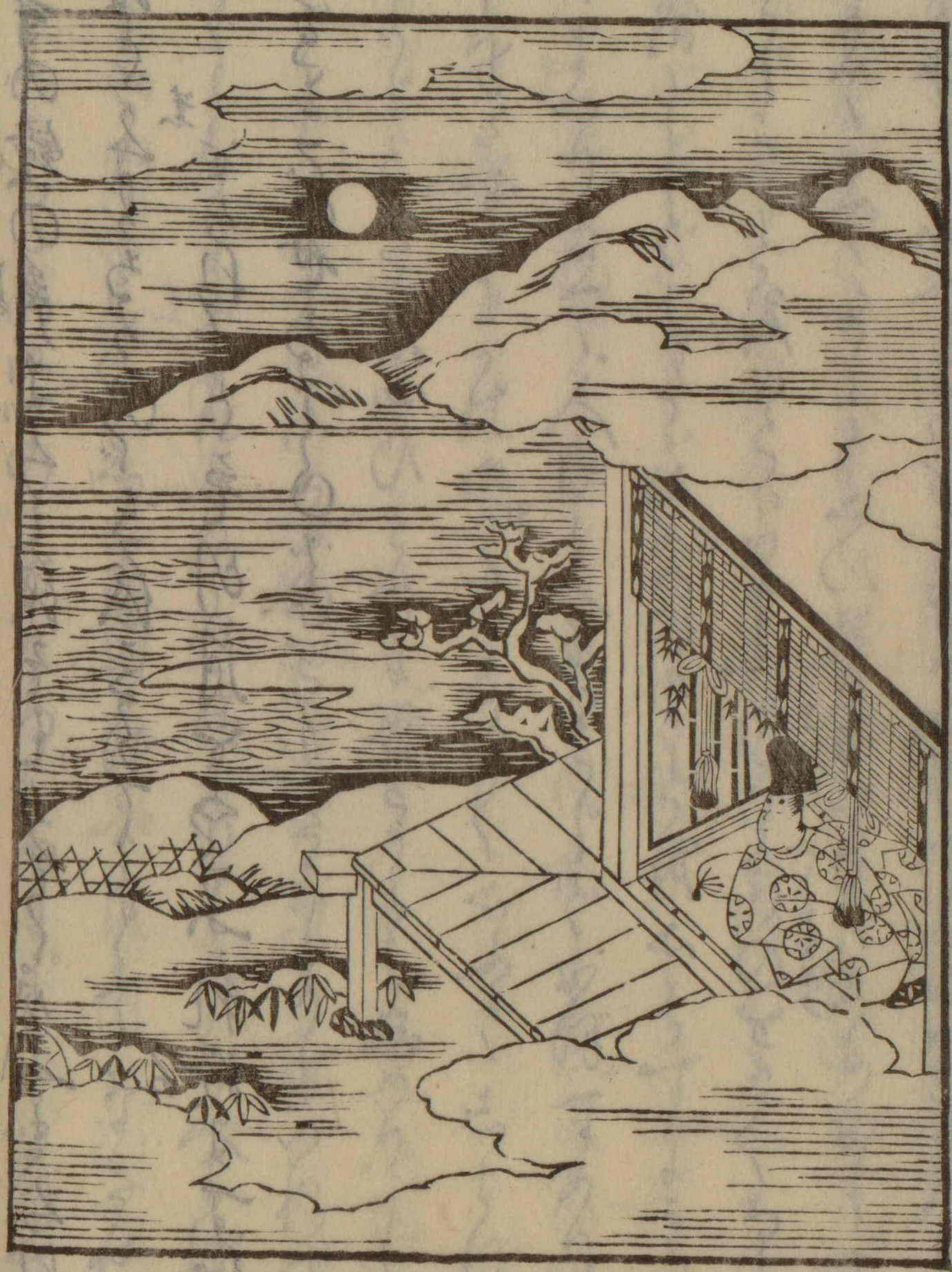
かざりの御りさ面さへとゝろなげまて。煙もおほく
むすぼれ給ひず女ぬるもあへなしと。あきれて
ひとり給ぬ。れいとまこまれる人ずおほくて。うゝろ
ぼそさはすゝしまざれぬべけれど。中の君ハ人乃
こゝろふんことゝもとゞしきまの心うきをさひ
しげこゝまて。又なき人まこゝ給。宮(匂)よりもれとふらひ
いとしげくなれ給。たゞ(中ん)ずまつしとさひ罪なく
ましかしこゝもおぼしなをとて。やゝぬるをおぼ
すまいとうき人のれゆりや。中(黄ん)納言くせのいと心
うく見ゆるついでまゝかいとげんとおぼさるれど。
三条の宮(女三)のおぼさんことまとゞうり。此君(中)のれこと

の心ぐるしさとよ。たひこぐれて。坂(みの)の給しやう
まて。形(かた)見まもこうべかりける物を。志るくの心は身を
分ゆへりともうけろふべくはおぼしざりしをうう
もれおもしせまうよりはこぐうちかたひてつさ
きぬなぐさめまもこまりかたまりしもれとなぐ
おぼすかりそめま京まもしお給もずかさ絶なぐさむ
なくなくてこまりおもすれ世の人もそろかなくず
たひゆへるまとこ三里て。うち(内裏)よりもじめまりて。
れとふたひおぼかりもうるくて日ごろも過れ。
七日(黄)くのことぐもいとこうとくきさせ給けるを
ろかなしずけうじゆへどうぎりあれば此ぞ此色の

風のいとをげしかれぞしとゝなろさせ給ひ
四方の山のかゝみとゝゆかけの氷月かげまいや
かましろし。茎京の家のうぐりちくとこうくもえ
かうはあらぬもやとおぼゆ。けづまいさ出てもれ
志給はましかば。もろともまこさこしましとしひけぐ
くるぞ。胸(ひね)よりあまるこゝろすう
茎 恋まびてしぬるくすりの床しさる雪の山
よや絵をけるまし。ちかばちかる偈(げ)なしへん鬼も
かれとことつけて。力もちげんとおぼすぞ。心(比)ざる
ちまさひだりこゝろちりけ。茎人ぐちうう呼(うび)出めて。物
絵ちどきさせ給けるひちどのいとゝあるまはしう。

のどやかに心ゆかさをこゝろ人ぞ。ゆかさいろろに
しめてめでたしとしひ。おいたるいろちおしう
いろじきこと紙いとぐおもふ。れろうちのをもくなし
せ給しことも。たぐ山宮の山とも紙をもすまこる
てまろりぬて。人ゆしへにいろじとおぼすめり
しを。さすがにかれ中りたにはかくせしとしれ
なしじと。たぐ山心ひとつに世をうしと給めりし
ほどに。たゞなきれたぐ地をもこさしめしいれず。
たゞよくりまるんよりせ給めりし。うたべには
なまじりことくしてしく。地ゆげにもくてなさせ
給ひて。しるの山心のうぎりなくなまごともおぼす

寺の鐘の声・まくら紙そぞぞそく・風ふきくれ
ぬとりすりちりひじき紙きくて
黒とくれじと更の月をしるふ乳終すむ
べきこの世ちりしもじ



中 これはいまは昔のはいまはこま。今いちまなでとくとも
みなしうけ給はりんとあまんあまひのふうぶうとりく
ちくおぼしへだけなき契のへど。けんろうげのごとく
まさ男あり女ありと。袖のこりましくそ。まざ對面(たいめん)
して袖あざむき契給はず。詞 これ君へわびやりたまり
ぬ。今すこしあさけさりくおはします。まれかし。
あるしうこ恋ひおもふこゝろざし深ぞ。ぞなりあまへ
けるにぞよまかれて おぼ中。言のかきこくしくして あり
日ひ日まずあずめくしくして 世人のすま浪ぢき
こよひふるさとしすれ月夜のくまりなく さし
そぞろなは。すゞれ巻あげてこのまへがむりひたい

めりしまこ家のれいましめまこへゝがひめうこと
とおいなう人(中)のれこ人をおぼしなやこそめし
なりと罪てありくまの給ひしとなどうり
心つて誰もくなき海どふこくつきまず(苦ん)けがこころ
うゝ何ぢきなきこと彼也ませまりけんとゝうり
人さ海同志くなべての世もつゝさま念誦(ねんぜ)せいと
衰まさまて海どろむ程なくなし給ままぶ夜
ゆきき程の雪のけらひいとさむげなるまゝ人ごこ思
あまるさしてむまれをとく罪也何ぐかいうるさ夜中
まゆき彼けくべきと大徳(ごいとこ)こちもおどろき思人
なまゝ家(白)なりのれぞまいこうやつれてぬれく入給

なりそうこうちてき給さ庵さなく里とさてなひて
中(芸)納言いくろへたるまま入なて、遊びておもすれ
いこは日数ありたりそれど心(句)浮なく見し(見び)侍て、夜一
夜ゆきままどいされてぞおりしましける。日比のつら
さもまぎれぬべき程なれど、(中心)對面志給べきこうち
もをず、(大ノ)おぼしなげきたる庵のもづしかりしを
やがてこゝろ浅され給もずなりましも。今より後のれ
ころあらたまらんいかひなりなべく。さひ志うて
抱志ゆへれば、誰もくいうじうことなりをきて
志しせけり。(白)抱ごしまてぞ日比のをこたりつきせず
の給をつ(中)ぐぐと里ゐゐへる。これもいとあるか

なきかなてどられ給まじきかやゝきしゆゑ御
けちひの心ぐるしき紙うしろめたういうじと文も
白ん
おぼしたりそふいれ身とすてくとまりなぬ抱ごし
なしぞといふくもびなんど今すこし抱見ゆる程
中詞
まて給しバとのこ字なしなてつれなき紙中納言も
菩
かし起きくなてぎるべき人めし出て此詞有き海に
さかひてこころあきさやうなりれまてなしの苦も
今も心うかりけり月ごろのつこいさもせひきて
なひぬべきことなれどよくかしぬき海にこそかし
ぐへなり給ちあがやうなることまぐこきしぬ此心
まてぐるしうおぼすんなどせびてさしがり

ぬへぐ、いよく（中ム）は（萱）の此心もたづしうてえ罪し
給ふず、あきましうろうくおりしかり、罪（白ム）しし
さ海ともむげにつまれ給けることをろかなるぞ
なげきくらしぬへらよりの気色いとゞそぞしさ
風の音に、人（中）やまなるぞなげきかしのへるもさす
がまて、例（白）の物へどそくさて給ひしのやまろをひき
かけて、けさきなげきこと紙奨きて給もいそ（中ム）
かくくちなれ給ひんとそろうそれどよそまてつれ
なき程のうとましさより衰に人の心もたをやぎ
ぬべきれさ海代ひとうとまもえうとこもろまで
うちうとしたつくぐと罪給て

中さしうさをさひ出りもとうるき紙の来うけ
てるまとのむらんと何のるの絵中(句ん)こいぶせう
ろろまとなし
句 川末氏らじうき袖とさひなばめれまへて
どまそむうざしなんなるごともいとうころほど
なさ世をつゝふくかなげしかいそとよろげる
うしらへぬへどうち(中)もなやましくなんとてゆり
絵まそり人(句ん)のこうしんもいと人まろうてなげさ
おし絵うしうんもことたりなる何どなれど
あまりま人まくもとつゝき泪のおつれがまして
いうまさひつんとさ角ぐあれまなげしさる

中納言のあるじがうるすこなれて人ごやすら
うまよびつかひ人もあまるこしてまれ来せなど
志給をおくれまもなかりしうも明ん(白ノ)ずいといたう
やをなをこほれぐしきまで抱をしひこれば心
ぐるしとこゝぬてまめやかまとかしひ給あり(慧ん)さ雨
ちどうひなきことなれど これ(白)家ることは罪しめと
ぶんどけいでんまつけてもいとうろよもくうつく
なしくこしなんまもじかりてことずくなすぐ
(白ん)はとのこちなきて日かず雨まなれば(慧ノ)ゆがもつまたい
しつうもこぐるしくはあしでいよくまれきよげは
なまめいるを如なしばかるしず心うしなんと

句
家よりも此（ミ）鋪（ぜ）程（こゝ）なるぞ、こちらこさまでとゝひ寄て
給（芸ム）くてのこやはあらしさとしさへなげさ
すぐさん、こゝりしこゝまもあぼつるくてぞぢこまり
ゐへることを望しゐへばいまはとてかへり給ふん
こちもさへんかるこなしかく（芸ノ）おりしなひてゝん（字法ノ人こん）
しげりつるなぞりなくなるんを、さひけぶ家人ぞ
いこぐりし物のさしあらりてかるしかりし
さはぎよりも、こちしづまりていとゞく笑ゆ、時ごおり
かしおりしやかるる程よ、さそしかもしおひし
年代よりも、くのどやかまてるしゐへる日ごろの
此宵さ夜けさひのるゝしくちさけかるしちるさ

ことまもまめなるかたまもおひやまぬ御かなれ
心ぢんを今はかぎりまこ生りさしけることなく
ぼれあへりかれ(句)こやよりはお紙かう来りくる
ともいとうたる紙おひまびてちうけるいなる
べきこと紙なんこぎうり出たるとまてこまへり
(明石中文ハ)さいの文さしめしつけて中(芸)納言をかを
をろかなるぞおもひ得れてゐるなるはげまをし
なべておひがたうこそはこれもおぼさるらめと心
ぐるしがりなて二条院の西の(こい)屋まはるいなて
はぎもかよひなべく思びて男をひかれ(句ん)女一家の
れまことよきて おぼしなるまやと御しなぐら

69038
6AP78